

ローズタウン遺跡群
富田下大日Ⅰ遺跡

ローズタウン住宅団地造成に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

前橋市埋蔵文化財発掘調査団



1. ローズタウン遺跡群 富田下大日I遺跡調査区全景



2. H-8号住居跡出土の灰釉陶器皿破片

序

前橋市は、北に赤城山、西に榛名山、南西に妙義山の上毛三山がそびえ、その赤城山と榛名山の裾野の間を南北に利根川が流れる水と緑にあふれた地であります。

前橋は古代より豊かな文化あふれる地であり、東日本でもきわだった内容を示しています。今から二万八千年前の旧石器をはじめとして、10基を数える国指定の古墳、関東の華とうたわれた前橋城、明治からの近代化を示す群馬県庁昭和庁舎等の近代化遺産など多くの文化財が残されています。

自然環境に恵まれたこの地では、古代からの人々の生活の跡が市内のほぼ全域に残されています。古代の人々の暮らした家の跡、使った石器や土器などの道具、水田跡など多く、毎年の埋蔵文化財発掘調査により多くの新しい発見があります。

ローゼタウン住宅団地が建設されようとしている江木・富田町周辺は、赤城山南麓の自然に恵まれた地であり、周辺では縄文時代からの人々の生活の跡がのこされています。

本年度調査のローゼタウン遺跡群 富田下大日I遺跡では、事業実施に先立ち、地区全域の試掘調査を行い、その後、発掘調査を実施いたしました。

発掘調査により縄文時代の住居跡と奈良から平安時代の住居跡、掘立柱建物跡などを調査し、地区の歴史解明に貴重な資料を得ることができました。

発掘調査にあたりまして、ご協力をいただきました市工業課、前工団、地元関係者、調査に従事されました皆様に感謝とお礼を申し上げます。

平成13年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 阿部 明雄

例　　言

1. 本報告書は、ローズタウン住宅団地造成事業に伴うローズタウン遺跡群 富田下大日Ⅰ遺跡発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は、群馬県前橋市江木町979番地の2他に所在する。
3. 調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。
4. 発掘調査担当及び調査期間は次のとおりである。
発掘・整理担当者 平野岳志・高山剛(前橋市埋蔵文化財発掘調査団)
発掘調査期間 平成12年5月24日～平成12年11月20日
整理・報告書作成期間 平成12年11月21日～平成13年3月23日
5. 本書の原稿執筆・編集は平野・高山が行った。
6. 発掘調査・整理作業にかかわった方々は、次のとおりである。(五十音順)
石井春江　岡野幾代　神沢方子　佐藤佳子　品田宗澄　下境弥　下境米治
高畑八栄子　富岡和子　内藤旭　内藤貴美子　内藤よし　中島利夫
荻原和子　峰岸あや子　吉田真理子
7. 発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1. 掘図中に使用した北は、座標北である。
2. 掘図に建設省国土地理院発行の1/5万地形図(前橋)と1/2500地形図(前橋)を使用した。
3. 本遺跡の遺跡コード名は12D16である。
4. 各遺構及び遺構施設の略称は、次のとおりである。
J…縄文時代の住居跡　H…古墳・奈良・平安時代の住居跡
B…掘立柱建物遺構　D…土坑　P…柱穴・貯蔵穴(住居内P₁を貯蔵穴とした。)
5. 遺構・遺物の実測図の縮尺は、次のとおりである。
遺構　住居跡・掘立柱建物遺構・土坑…1/60、全体図…1/400　　炉・竈断面図…1/30、
遺物　土器…　石器…　鐵器・鐵製品…
6. スクリーントーンの仕様は次のとおりである。
遺構平面図　燒土…、粘土…
遺構断面図　構築面…
遺物実測図　土器に付着した竈の粘土…、須恵器断面…、いぶした部分…
石器使用痕…
7. 遺物分布図のシンボルの使用は次のとおりである。
●…土器、○…須恵器、△…灰釉陶器、▲…鐵器・鐵製品、□…石器・石製品
なお、接合状態は実線で結んだ。
8. 火山降下物の略称と年代は次のとおりである。
As-B (Bテフラ：供給火山・浅間山、1108年)
Hr-F P (F P軽石：供給火山・榛名山、6世紀中葉)
As-C (C軽石：供給火山・浅間山、4世紀中葉)

目 次

序

I 調査に至る経緯.....	2
II 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の立地.....	2
2 歴史的環境.....	4
III 調査の経過	
1 調査方針.....	6
2 調査経過.....	7
IV 層序.....	11
V 遺構と遺物	
1 住居跡.....	12
2 掘立柱建物遺構.....	13
3 土坑.....	14
VI 成果と課題	
1 遺構の検出状況について.....	16
2 住居跡について.....	17
3 掘立柱建物について.....	18
4 出土遺物について.....	18
5 遺跡地集落の変遷について.....	19

図 版

巻頭図版 1 ローズタウン遺跡群 富田下大日 I
遺跡調査区全景

巻頭図版 2 H-8号住居址出土の灰釉陶器皿破
片

- P.L. 1 試掘トレンチ・D-1号土坑・
H-1・2・3号住居跡
2 H-3・4・5・7・8号住居跡
3 H-7・8・9・10号住居跡
4 H-10・11・13・14号住居跡
5 H-12・13・16・17号住居跡
6 B-1・2・3・4・5・7・9・10号
掘立柱建物遺構
7 B-6・8号掘立柱建物遺構
8 試掘調査時・H-1・2・3号
住居跡出土の土器

- P.L. 9 H-4・5・6・7・8・9号住
跡出土の土器
10 H-11・12・13・14号住居跡
出土の土器
11 H-16・17・J-1号住居跡
D-1号土坑出土の土器
12 鉄製品・石器・石製品・
縄文土器
13 縄文土器

挿 図

	頁
Fig. 1 ローズタウン遺跡群の位置	1
2 ローズタウン遺跡群周辺図	3
3 平成12年度調査経過図	7
4 試掘調査トレンチ設定図	8
5 平成12年度ローズタウン遺跡群 富田	
7 J-1・H-1号住居跡	24
6 ローズタウン遺跡群標準土層図	11
7 J-1・H-1号住居跡	24
8 H-2・3号住居跡	25
9 H-4・5号住居跡	26
10 H-7号住居跡	27
11 H-6・8号住居跡	28
12 H-9・10号住居跡	29
13 H-11・12号住居跡	30
14 H-13・14号住居跡	31
15 H-16・17号住居跡	32
16 B-1・2号掘立柱建物遺構	33

	頁
Fig.17 B-3・4・5・6号	
掘立柱建物遺構	34
18 B-7号掘立柱建物遺構	36
19 B-8号掘立柱建物遺構	37
20 B-9・10号掘立柱建物遺構	38
21 D-1・2・3・4・5・6・7・ 8・9号土坑	39
22 D-10・11・12・13・14・15・16・ 17・18・19・20・21号土坑	40
23 試掘調査時出土遺物	41
24 試掘調査時出土遺物	42
25 試掘調査時出土遺物	43
26 H-1・2・3号住居跡	
出土の土器	44
27 H-3・4号住居跡出土の土器	45
28 H-5・6・7号住居跡	
出土の土器	46

	頁	
Fig. 29 H - 8・9・10・11・12号住居跡	Fig. 33 調査区出土の縄文土器	51
出土の土器	34	52
30 H - 12・13号住居跡出土の土器	35	53
31 H - 14・16・17号住居跡	36	54
出土の土器	49	
32 H - 7号住居址・D - 1号土坑出 土の土器および調査区出土の土製 品・石製品・鉄製品	50	

表

	頁		
Tab. 1 積穴住居跡一覧表	12	Tab. 3 遺物観察表	21
2 摺立柱建物遺構一覧表	13	4 発掘調査報告書抄録	55



Fig. 1 ローズタウン遺跡群の位置

I 調査に至る経緯

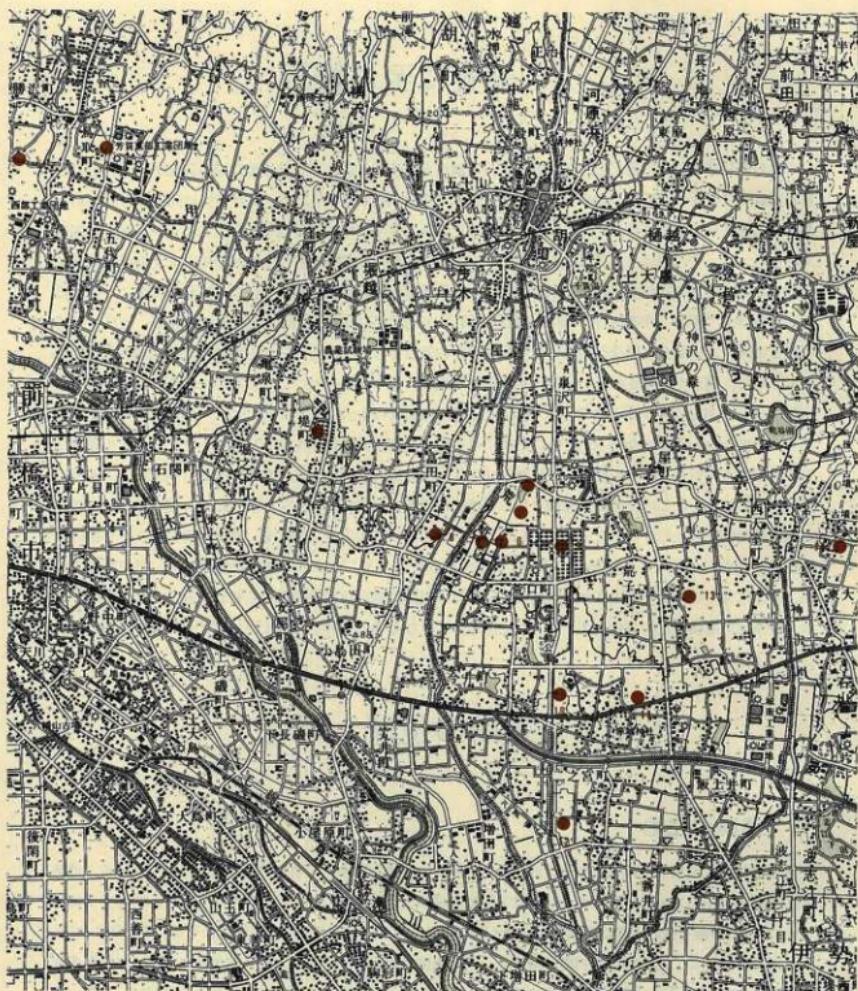
平成11年10月25日、前橋工業団地造成組合（前橋市商工部工業課、以下前工団）から同市教育委員会文化財保護課へ住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財確認調査の依頼が打診される。これを受け同年10月28・29日、同文化財保護課で試掘調査を実施。試掘を実施した箇所は住宅団地の調整池の部分であったが、遺構は確認できなかった。平成12年4月17日、前工団より文化財保護課に住宅団地造成予定地の埋蔵文化財発掘調査が依頼される。そこで同年4月18日に前工団と文化財保護課の間で発掘調査についての協議を経て、5月18日前工団管理者 萩原 弥治と、前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 阿部 明雄との間で、埋蔵文化財発掘調査委託契約が締結の運びとなり、5月24日から現地での発掘調査を開始するに至った。調査を依頼されている箇所が住宅団地造成により掘削されてしまう高台と、新たに住宅団地内に造成される道路予定地部分に限られるものの、調査面積が45haと広大であるため、調査開始はまず試掘調査から取りかからねばならなかった。そのため7月中旬まで遺構分布状態を確認するために、トレンチ掘削による試掘調査を行った。この結果、昭和30~40年代に実施された土地改良のため、調査対象区域の大部分で攢乱が認められた。このため調査面積に比して検出遺構並びに検出遺物は少なかったが、遺構の分布が調査対象区域南側に散在していることが判明した。このため平成12年度分の調査を、調査現場プレハブ小屋近辺の遺構が集中して検出された部分に限定し（A区と呼称）、7月17日より本調査を開始した。試掘調査の結果、A区以外の場所から検出された遺構については、民間調査会社に発掘調査を委託することになった。なお、調査地に造成予定の「ローズタウン住宅団地」にちなんで、遺跡名称に「ローズタウン」を使用した。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

本遺跡地は、前橋市街地から東方に約6kmほど離れた前橋市江木町・富田町に跨るように所在する。遺跡地の地番は富田町1791番地ほかである。本遺跡地は赤城山麓傾斜地の南端部に位置しており、中央部に幅約300mほどの谷地を挟むように南東方向に長く延びた台地上にある。その台地を囲むように住宅が建ち並び、西側は萱野団地に、北東部は大胡町に接する。また遺跡地の北側には前橋大間々桐生線、南側には前橋赤堀線といった主要幹線道が遺跡地を南北に挟みこむように走っている。赤城山南麓傾斜地は宮城村三夜沢、標高にして約500m付近から山麓傾斜地に移る。そこから約10kmほど下り、遺跡地の南側約1km近辺で沖積傾斜地にぶつかる。低地帯と山麓傾斜の接合部の標高はおよそ80m、本遺跡地の標高は約114mである。

遺跡のある赤城山南麓は関東ローム層を基盤とする洪積台地が発達し、広大な農作地帯が広がっている。また、この赤城山南麓傾斜地には山頂部の小沼から流れる柏川をはじめとして、荒砥川・白川等が放射線状に流れ出しており、その間を中小の河川が枝状に流下している。これら大小の河川が形成する谷地の沖積地はかなり広大な様相を呈しており、遺跡の分布は標高約350mから標高400m辺りの一帯を北限とし、山麓を



1 : 50,000

前 橋

1000m 0 1000 2000 3000

1. 小神明道路 2. 芳賀東部工業団地遺跡 3. 萱野道路 4. 北原道路 5. 須訪道路 6. 須訪西道路 7. 荒砥須訪西道路
 8. 富田古墳群 9. 鶴が谷道路 10. 荒砥大日塚遺跡 11. 荒砥上ノ坊道路 12. 荒砥島原遺跡 13. 舞台道路 14. 西大室丸山道路

環状に取り巻いている。さらに火山性泥流丘（流れ山）も數カ所で確認されており起伏に富んだ地形である。このような地形は原始から古代にかけ集落を形成する上でも適していたようで、県内でも遺跡分布が集中している地帯もある。

また枝状に流下している河川によって複雑に絡み合う谷地が作り出され、そこには水田が多く開拓されている。谷地は比較的狭いものがほとんどであるが、谷底部は標高の高い場所でも水田になっている。本遺跡地にも中央部に幅約300mの谷地が南北に横たわり谷地水田面と台地部高低差は東側で約7m、西側萱野団地との高低差は約9mである。周辺部は土地改良に伴って大小様々な遺跡の発掘調査が長年にわたり行われ数多くの遺跡が発見されている。特に本遺跡地から東側に流れている荒砥川左岸の台地上は、昭和50年代に行われた県営荒砥北地区は場整備事業に伴う埋蔵文化財調査においてそのほとんどが遺跡地であるといつても差し支えがないほどの調査報告がなされている。

2 歴史的環境

本遺跡地周辺の歴史的環境について概観してみたい。本遺跡地と幅約200mの谷地を挟んだすぐ西側に隣接している萱野団地は昭和60年・61年度にかけて発掘調査が行われ、横穴式古墳1基、縄文時代から古墳・奈良・平安時代にかけての集落跡が住宅団地面積5万m²にわたり竪穴住居跡30軒以上が検出された。遺跡地東方約6kmの地点には大室古墳群があり縄文時代・古墳から平安時代にかけての集落遺跡跡、及び古墳が集中的に分布している。また、本遺跡地の南東約1.7kmに流下する荒砥川東岸の地域では、荒砥北都・南部・西大室区域での大規模なは場整備事業により土地開発が進められ、それに伴う発掘調査が昭和50年代から昭和60年代にかけ行われた。その結果、荒砥川流域は先史時代から近世までの遺跡が間断なく続いている事が判明した。以下は、荒砥川周辺地域も含め、時代ごとに歴史的環境を記してみたい。

赤城山南麓の台地は埋蔵文化財の宝庫である。まず縄文時代の遺跡は、標高550mより下の地域で、国道353号線付近に重点的に分布している。本遺跡地から検出された縄文時代の遺構は少なかったが、試掘調査の時点でトレンチ内から縄文時代中期の加曾利E式土器が出土している。この出土土器の大半は遺物包含層から出たものであり、遺構との明確な関連性は薄いと思われる。本遺跡地の北東約3kmの大胡町上大屋南部遺跡群にある西小路遺跡・上ノ山遺跡・御防東遺跡群からも同時期の賀曾利E式土器と竪穴住居址の調査報告がなされている。

本遺跡地の北西約5kmほど離れたところに位置する芳賀東部団地遺跡群では昭和48年から8年間発掘調査が行われ、縄文時代から中近世までの住居跡が数百軒検出されている。芳賀地区からは、縄文時代草創期・早期の土器が出土しており、縄文時代の前期の櫛町、鳥取町、勝沢町等の遺跡調査では竪穴住居が検出されている。

また、荒砥川左岸では荒砥北原遺跡・荒砥宮田遺跡でも、縄文時代前期から中期にかけての竪穴住居・土坑を検出している。

弥生時代になると周辺部の遺跡数は減少する。荒砥川左岸の荒口前原遺跡で弥生時代中期の住居跡が調査されており、竜見町式土器が出土したり、荒砥大日塚遺跡・鶴が谷遺跡・粟訪遺跡・内堀遺跡群・荒砥上ノ坊遺跡などに数軒の竪穴住居を調査した例があるが、住居軒数自体は少ないものである。芳賀地区についても弥生時代の遺跡はあまりみられない。小神明II遺跡からは弥生時代中期から後期にかけての住居跡が2軒検出されたが、うち1軒は焼失住居であったことが分かっている。小神明IV遺跡からも竪穴住居跡1軒を検

出している。隣接地区では、大胡町の金丸遺跡に弥生時代中期の岩櫃山式の壺や甕を出土した調査報告がある。この時代の多くの遺跡は水田耕作に適した谷地地形の地域を中心に広まる傾向がある。弥生時代中期後半の集落遺跡としては前橋市荒砥島原遺跡、荒砥前原遺跡等で確認されている。

古墳時代に入ると、赤城山南麓一帯には急激に遺跡数が増えることになる。前橋市広瀬町の八幡山古墳・前橋天神山古墳等に代表されるように、古墳の大型化が進み、群馬町では三ツ寺居館が作られた時期である。また芳賀地区的鳥取町には古墳群が形成されたものこの頃である。芳賀東部団地においては堅穴住居跡374軒、掘立柱建物跡206棟にも及ぶ集落遺跡が調査されているが、これは古墳時代から奈良・平安時代のものである。また隣接している芳賀西部団地遺跡においても古墳時代の古墳が30基、芳賀北部団地も堅穴住居跡227軒、掘立柱建物跡8軒、製鉄跡3基を検出している。この地区には奈良時代になると勝沢・小坂子・小神明・嶺町に集落が形成されるようになる。また、本遺跡地の東側荒砥川流域では、石田川式土器が検出された遺跡が数多く存在しており、古墳時代の集落を形成している。特に荒砥川流域の地域は他地域と交流する点で利便性があったようである。ここには石田川式土器を供伴する遺跡が多く、古墳時代の集落が継続的に存続していたと考えられる。荒砥川左岸の北原遺跡からは、古墳時代前・中・後期の堅穴住居が合わせて73軒、円形周溝墓2基が調査され、荒砥川の自然堤防上に位置する諏訪西遺跡からは堅穴住居址11軒・古墳を2基（うち一つは堅穴式石室）が調査された。荒砥諏訪西遺跡からは古墳時代前期の堅穴住居址49軒、古墳時代後期の堅穴住居跡10軒がいずれも荒砥川左岸の丘陵地帯に集中している。荒砥川東側の前橋市域だけでも古墳時代中期の集落遺跡は20遺跡以上、古墳時代後期の遺跡では36遺跡も確認されている。荒砥左岸地域（泉沢町・荒口町・今井町・荒子町・西大室町）には、この時期に数多くの古墳も造られている。当時これらの集落の数が古墳の数多い分布にそのまま反映されているようである。荒砥川とその東側の赤堀町を南流する柏川流域は、県内では最も古墳の分布が集中している地域である。『上毛古墳綜覧』にも旧荒砥村には365基、赤堀町域にも333基の古墳が存在していたと記述されている。

群馬県で初めて古墳が築造されたのは4世中頃から後半にかけてといわれている。その頃の古墳は高崎・藤岡方面の西毛地域と前橋から太田市にかけての東毛地域の平野部に点在している。こうした古墳や集落の分布状況を見てみると、それぞれの地域ごとに生活圏が形成され、首長と呼ばれる支配層が次第に頭角を現し、成長を遂げてゆくと当時の様子を想像することが出来そうである。本遺跡地周辺にも古墳群が多数存在する。代表的なものとしては、前橋市西大室古墳群・富田古墳群・荒子古墳群・赤堀町多田山古墳群・伊勢崎市波志江古墳群等、枚挙にいとまがない。荒砥川左岸丘陵部の舞台西遺跡では古墳が4基、西大室丸山遺跡では、古墳を3基調査している。西大室丸山遺跡の古墳では石室の形態が、県内では6世紀から導入されたとされる横穴式石室である。副葬品からも判断し築造時期は6世紀後半から7世紀前半とみられる。この遺跡ではその他、多くの石製模造品と有孔円錠・白玉・手捏土器、少量の須恵器が検出された。また、祭祀跡も見つかっている。祭祀跡は周辺に巨石が数個見つかっており、その巨石を対象にした祭祀跡であることが判明した。祭祀跡が見つかっている遺跡は西大室丸山遺跡以外にも群馬町の三ツ寺I遺跡（5世紀後半）、伊勢崎市の原之城遺跡（6世紀前半）がある。巨石を対象とした祭祀跡は宮城村の樅石や高崎市の正觀寺遺跡が挙げられる。前橋市泉沢町にある丸山遺跡からは環濠複列居館が検出され、そのすぐ南にある荒砥荒子遺跡からも同様の環濠居館が調査されている。泉沢・荒口地区からは和泉式土器を供伴する住居跡も多数検出されており、かなりの規模の集落がこのような環濠居館を囲むように存在しており、政経上の重要拠点となっていたようである。また本遺跡地の北西の五代町には7世紀前半の副葬品を出土した五代大日塚古墳、南西約3kmの堀之下町には後円部に横穴式石室を持つ正円寺古墳がある。

奈良・平安時代の遺構としては、本遺跡地の検出遺構からも数軒確認できた。本遺跡地の東側に位置する富田遺跡群からも57軒の奈良・平安時代の堅穴住居跡を検出している。周辺部の遺跡としては芳賀東部団地遺跡から堅穴住居跡374軒、掘立柱建物跡206棟と大量に発見されたのをはじめとして、芳賀北部団地遺跡からも奈良・平安時代堅穴住居跡が227軒、製鉄跡も3カ所で検出された。古墳時代から継続的に形成された生活圏が平安時代に入りても途絶えることなかったようである。平安時代中期に記された『和抄』にも勢多九郷の内の1郷として集落が発展していった様が見て取れる。上泉・五代町にある檜峯遺跡からは奈良三彩小壺が発見された。当時は貴重であった奈良三彩小壺がこの赤城南麓の一帯から出土したことは、周辺地域の文化的な水準が高かったことを示す重要な遺物である。

III 調査の経過

1 調査方針

調査の実施にあたっては、依頼を受けた調査面積が約45haと広大であるため、まず対象面積全体に試掘トレンチを入れ、遺跡地を確認することから始めた。さらに本調査に関しては、依頼者より団地造成の際に切り崩すことになる高台部分と、団地造成により新たに設定される道路部分に当たる範囲についてのみ、調査を行うという条件があったため、条件提示部分で検出された遺構を中心に調査範囲を広げて行った。その結果、調査範囲ほぼ中央部の高台東傾斜部7,268m²が本発掘調査対象となった。

本調査実施に先駆け調査範囲全体をカバーする4mグリッドを設定し、このグリッドを最小単位とした。グリッドについては西から東へX1、X2、X3…と、北から南へY1、Y2、Y3…と付番し、グリッドの呼称は東西の交点の名称を使用した。

ローズタウン遺跡群 富田下大日I遺跡のX116・Y92の公共座標は、

第IX系	+43732.000m (X)	-61836.000 (Y)
緯度	36°23'31".9430	経度 139°08'38".1791
子午線収差角	24°32".5	増大率 0.999947

調査方法については、表土掘削・遺構確認・杭打設・遺構掘下・遺構精査・測量・全景写真撮影の手順で行うこととした。

図面作成は、平板・簡易造り方測量を用い、住居跡・掘立柱住居遺構等の遺構は1/20、住居跡は1/10の縮尺で作成した。遺構の遺物については、平面分布図を作成し、台帳に各類記録を記載しながら収納した。包含層の遺物はグリッド単位で収納したが、重要遺物については分布図・遺物台帳の記載を行い収納した。また、プラン確認の段階で1/400の現況図を作成し、その後の調査に活用した。

2 調査経過

5月24日より依頼された団地造成区域45haの全域について、試掘調査を開始した。この結果、ほとんどの区域が昭和30年代から40年代にかけての土地改良事業の影響を受けており、遺物包含層の直上までの地層は全域で擾拌されていることが判明した。僅かに調査区中央台地部分東側の緩傾斜面に遺構を確認することができた。その場所についても遺構確認面の僅か2cm直上までは、土地改良時により擾拌されているような状態であった。

調査には時間的な制約もあるため、掘削用の重機（バックフォー0.7m³）による表土除去を行った。暗黄褐色のソフトローム層上面まで確認トレンチを掘り下げ、7月12日までに試掘トレンチ調査を終了した。本発掘調査は7月17日より着手し、試掘調査の時点で最も遺構が確認された中央台地東側の緩傾斜面一体に設定し、重機を用いての表土除去並びにプラン確認を行った。お盆休みを挟み9月から10月末までに縄文時代の住居跡1軒、奈良・平安時代の住居跡16軒、掘立柱建物遺構10棟を検出した。雨天時には出土遺物の洗浄と注記作業並びに図面整理を行った。11月16日には委託業者による小型飛行船を用いた空中写真撮影を行い、11月22日をもって現地での調査は終了となった。12月に入ってきたら、文化財保護課内整理作業室において、出土遺物・図面・写真等の整理作業を行い、翌年3月23日に全作業を完了する運びとなつた。

	試 掘 調 査	表 土 削 除	遺 構 確 認	杭 打 設	遺 構 掘 下 ・ 精 査	測 量 ・ 図 面 作 成	写 真 撮 影
5月							
6月							
7月							
8月							
9月							
10月							
11月							

Fig. 3 平成12年度調査経過図

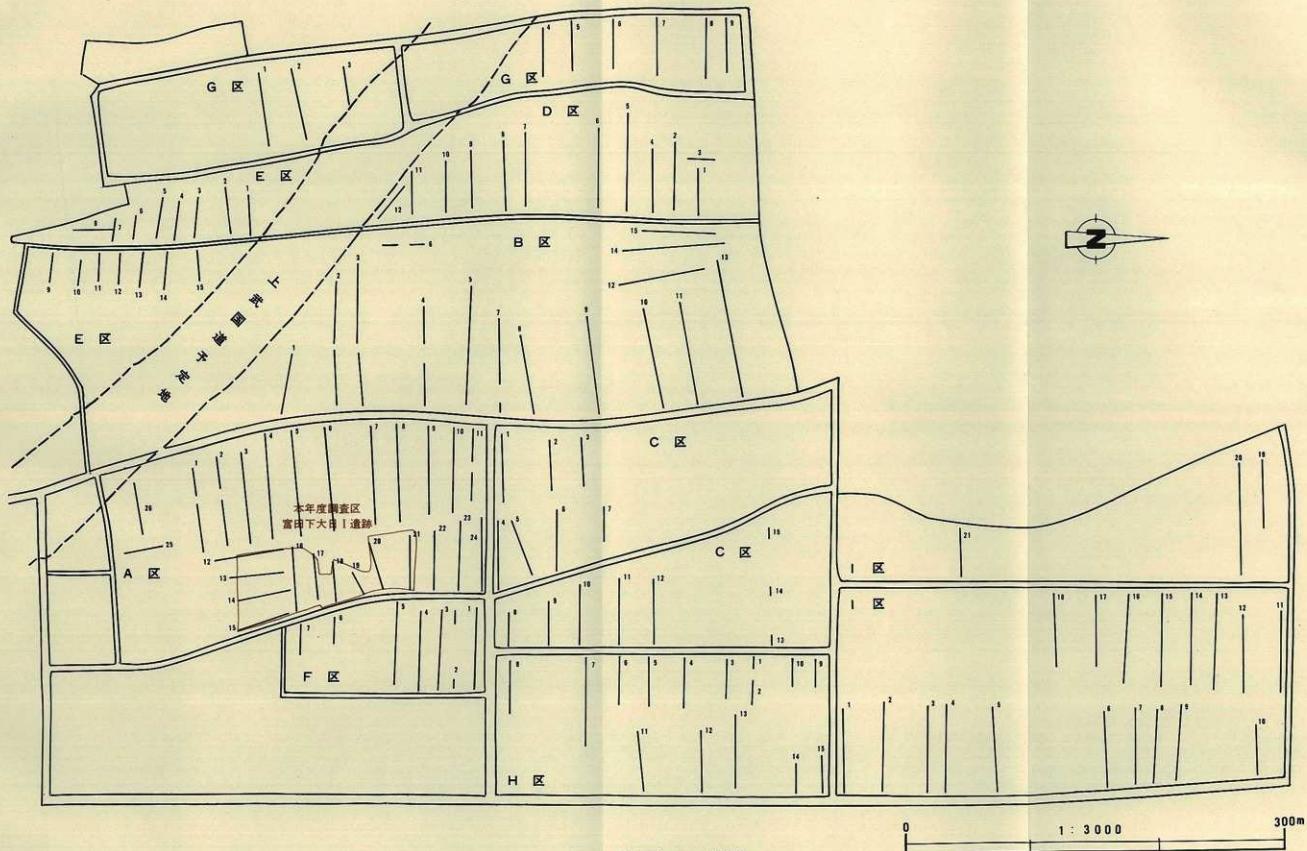


Fig. 4 試掘調査トレンチ設定図

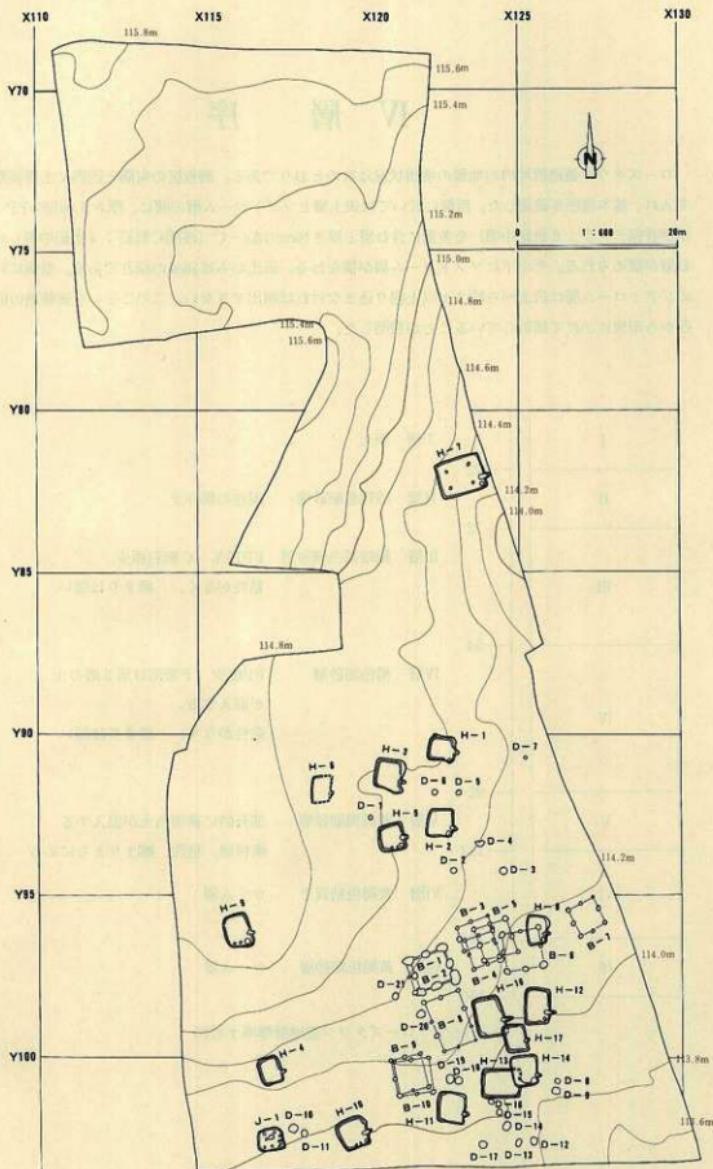


Fig. 5 平成12年度ローズタウン遺跡群 富田下大日Ⅰ遺跡調査区全体図

IV 層序

ローズタウン遺跡群地内の地層の堆積状況は次のとおりである。調査区の東側と西隅に土層観察用の深堀を入れ、基本層序を確認した。西側に於いては表土層とソフトローム層の間に、厚さ6cm程のFP(株名ニッケイ伊香保テフラ:6世紀中頃)を多量に含む層と厚さ16cmのAs-C(浅間C軽石:4世紀中頃)を僅かに含む層が認められる。その下にソフトローム層が横たわる。表土からは58cmの深さである。東側に於いてはこのソフトローム層は表土から約2m以上掘り込みなければ検出できない。このことから遺跡地の旧地形は北西から南東にかけて傾斜していることが判明した。



Fig. 6 ローズタウン遺跡群標準土層図

V 遺構と遺物

1 住居跡

縄文時代住居跡 1軒、奈良・平安時代住居跡16軒検出。Tab. 1を参照。

Tab. 1 積穴住居跡一覧表

住居 No	主軸方向	規 模 長軸×短軸(m) 壁 高(cm) 面 積(m ²)	盤下周溝	竪		貯蔵穴	主な 遺 物	推定時期
				位 置	焚 口			
J - 1	N-90°-E	3.19×2.76 -1.5~16 8.18	—	—	—	—	深鉢	縄文時代 前 期
H - 1	N-85°-W	3.33×3.12 -22~35 10.89	竪・貯蔵穴を 除き全周	東壁南寄り	39cm	東南隅外	土師壺 土師甕	9世紀末期
H - 2	N-82°-W	3.48×3.33 -15~23 13.54	竪・貯蔵穴を 除き全周	東壁南寄り	59cm	東南隅外	酸化エン焼成須恵壺	10世紀中期
H - 3	N-80°-W	4.26×3.52 -15~29 16.05	竪・貯蔵穴を 除き全周	東壁南寄り	52cm	張出棚	土師壺 土師甕	9世紀末期
H - 4	N-69°-E	3.40×2.68 -18~38 11.96	竪・貯蔵穴を 除き全周	東壁南寄り	57cm	東南隅	土師壺	10世紀
H - 5	N-79°-E	3.35×3.22 -13~32 11.31	竪・貯蔵穴を 除き全周	東壁南寄り	80cm	東南隅 入口部	須恵壺	9世紀初頭
H - 6	N-88°-W	3.32×2.33 -2~4 8.59	—	東壁南寄り	56cm	北	須恵高台付椀	10世紀中期
H - 7	N-74°-E	5.63×4.52 -33~68 26.42	柱穴 4	東壁南寄り	62cm	東南隅	土師壺 須恵壺	8世紀末期
H - 8	N-70°-E	3.75×2.27 -28~35 9.65	—	東壁南寄り	41cm	東南隅	土師壺・高台壺 須恵高台付椀 灰釉陶器	10世紀初頭
H - 9	N-72°-E	4.28×3.43 -42~55 14.03	竪北から西壁 まで	東壁南寄り	35cm	東南隅	—	時期不明
H - 10	N-76°-E	3.78×3.08 -19~27 13.63	竪北から西壁 まで	東壁南寄り	56cm	入口構造	土師壺	9世紀
H - 11	N-77°-W	3.73×3.52 -14~32 13.52	西壁	東壁南寄り	51cm	—	—	10世紀初頭
H - 12	N-90°-E	4.42×3.08 -41~61 14.75	竪北から南壁 まで	東壁南寄り	59cm	東南隅	土師壺 須恵壺 台付甕(脚部)	9世紀末期
H - 13	N-88°-E	4.65×3.52 -36~46 17.50	東壁を除き全 周	東壁南寄り	79cm	—	土師甕 須恵壺	9世紀後半
H - 14	N-83°-E	3.92×2.93 -33~44 12.07	—	東壁南寄り	41cm	東南隅 入口部	土師壺	9世紀
H - 16	N-74°-E	5.02×3.52 -38~57 17.92	南壁東半分を 除き全周	東壁南寄り	45cm	—	土師壺 須恵壺	8世紀後半
H - 17	N-80°-E	3.57×2.62 -35~48 9.59	東壁を除き全 周	東壁南寄り	24cm	—	酸化エン焼成須恵壺 須恵壺	10世紀後半

*壁高は、遺構確認面から床面までの高さ(cm)

2 堀立柱建物遺構

奈良・平安時代の堀立柱建物跡10棟検出。Tab. 2を参照。

Tab. 2 堀立柱建物遺構一覧表

No	主軸方向 棟 走 向	規 模 (間)	梁間・桁行(m) 柱 間 (m) 面 積 (m ²)	柱 穴 形 状 長径×短径 (cm) 深 さ(cm)	重複関係	出 土 遺 物
B-1	N-16°-W E-W	2×2	3.9×5.4 梁2.40・桁1.95 19.83	円 30×30 53	B-2号より後世。	-
B-2	N-15°-W E-W	2×2	3.9×5.4 梁2.40・桁1.80 21.25	円 30×30 48	B-1号に先行。	-
B-3	N-70°-E E-W	2×2	3.0×4.2 梁1.40・桁1.00 13.04	円 30×30 51	B-4号に先行。 B-5号より後世。	-
B-4	N-68°-E E-W	2×2	3.6×3.6 梁1.30・桁1.30 13.57	円 26×26 45	B-3・5号より後 世。	須恵壺
B-5	N-72°-E E-W	2×2	3.9×4.2 梁2.10・桁1.95 18.18	梢円 30×16 39	B-3・4号に先行。	-
B-6	N-80°-E E-W	2×2	4.5×4.8 梁2.40・桁2.25 22.22	梢円 34×30 42	B-8号より後世。	-
B-7	N-65°-E E-W	2×2	3.6×3.6 梁1.80・桁1.80 12.67	梢円 22×18 36	-	-
B-8	N-23°-W N-S	2×3	4.5×6.9 梁2.30・桁2.25 28.38	梢円 30×28 39	-	平底の土師壺
B-9	N-11°-W	2×2	3.9×4.5 梁2.25・桁1.95 16.63	梢円 24×24 40	B-10号より後世。	-
B-10	N-89°-W E-W	2×2	4.2×4.2 梁2.10・桁2.10 19.00	梢円 30×20 51	B-9号に先行	-

3 土 坑

(1) D-1号土坑 (Fig.21)

位置 X120、Y92グリッド 形状等 卵円形。長径66cm、短径54cm、深さ16cm。遺物 総数172点。時期 古墳時代。

(2) D-2号土坑 (Fig.21)

位置 X122、Y94グリッド 形状等 円形。長径72cm、短径70cm、深さ34cm。遺物 無し。時期 不明。

(3) D-3号土坑 (Fig.21)

位置 X124、Y94グリッド 形状等 円形。長径94cm、短径90cm、深さ47cm。遺物 無し。時期 不明。

(4) D-4号土坑 (Fig.21)

位置 X123、Y93グリッド 形状等 楕円形。長径108cm、短径84cm、深さ29cm。遺物 無し。時期 不明。

(5) D-5号土坑 (Fig.21)

位置 X122・123、Y91グリッド 形状等 円形。長径72cm、短径60cm、深さ31cm。遺物 無し。時期 不明。

(6) D-6号土坑 (Fig.21)

位置 X122、Y91グリッド 形状等 円形。長径74cm、短径72cm、深さ39cm。遺物 無し。時期 不明。

(7) D-7号土坑 (Fig.21)

位置 X125、Y90グリッド 形状等 楕円形。長径46cm、短径50cm、深さ51cm。遺物 無し。時期 不明。

(8) D-8号土坑 (Fig.21)

位置 X125・126、Y100グリッド 形状等 円形。長径70cm、短径60cm、深さ32cm。遺物 無し。時期 不明。

(9) D-9号土坑 (Fig.21)

位置 X125・126、Y100・101グリッド 形状等 長方形。長径107cm、短径85cm、深さ27cm。遺物 総数3点。時期 不明。

(10) D-10号土坑 (Fig.22)

位置 X117、Y102グリッド 形状等 楕円形。長径102cm、短径101cm、深さ56cm。遺物 無し。時期 不明。

(11) D-11号土坑 (Fig.22)

位置 X118、Y102グリッド 形状等 円形。長径86cm、短径80cm、深さ33cm。遺物 無し。時期 不明。

(12) D-12号土坑 (Fig.22)

位置 X125、Y102グリッド 形状等 円形。長径90cm、短径87cm、深さ42cm。遺物 総数3点。時期 不明。

(13) D-13号土坑 (Fig.22)

位置 X124、Y102グリッド 形状等 卵円形。長径102cm、短径67cm、深さ45cm。遺物 無し。時期 不明。

(14) D-14号土坑 (Fig.22)

位置 X124、Y102グリッド 形状等 楕円形。長径115cm、短径95cm、深さ40cm。遺物 総数2点。時期 不明。

(15) D-15号土坑 (Fig.22)

位置 X124、Y101グリッド 形状等 円形。長径70cm、短径60cm、深さ34cm。遺物 無し。時期 不明。

(16) D-16号土坑 (Fig.22)

位置 X123・124、Y101グリッド 形状等 卵円形。長径70cm、短径60cm、深さ34cm。遺物 総数1点。時期 不明。

(17) D-17号土坑 (Fig.22)

位置 X123、Y102グリッド 形状等 卵円形。長径105cm、短径83cm、深さ27cm。遺物 総数14点。時期 不明。

- (18) D-18号土坑 (Fig.22)
位置 X122・123、Y100グリッド 形状等 円形。長径105cm、短径96cm、深さ33cm。遺物 総数1点。
時期 不明。
- (19) D-19号土坑 (Fig.22)
位置 X122、Y100グリッド 形状等 円形。長径103cm、短径115cm、深さ47cm。遺物 総数17点。
時期 不明。
- (20) D-20号土坑 (Fig.22)
位置 X121、Y98グリッド 形状等 円形。長径103cm、短径85cm、深さ38cm。遺物 無し。時期 不明。
- (21) D-21号土坑 (Fig.22)
位置 X120・121、Y98グリッド 形状等 円形。長径85cm、短径76cm、深さ21cm。遺物 無し。時期 不明。

VI 成果と課題

ローズタウン住宅団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査の範囲は、宅地造成のため削り取られる微高地と新たにつくられる道路部分とに限られた。埋め立て造成する部分については盛土で遺構の保護層を確保できるため、試掘調査で遺構が確認されたとしても調査を行わないことを原則とした。

調査範囲内で検出された遺構は竪穴式住居跡・掘立柱建物遺構・土坑という結果であった。いくつかの遺構が昭和30から40年代にかけての土地改良事業のため上部を削り取られてしまっていたが、大半の遺構は良好な検出状態であった。集落は、掘立柱建物を取り囲むように竪穴住居が位置しており、それぞれの遺構からは8世紀末から10世紀代と推定される遺物が出土した。

住宅団地造成に伴う埋蔵文化財調査は、土地買収や工事等に合わせて複数年度に跨ることとなった。今年度、諸般の事情により調査できなかった場所については次年度以降に調査を行うこととした。今後、本遺跡の調査が進んでいけば、周辺地域の歴史をより詳細に解明するための資料が得られるものと思われる。そこでここでは、本年度の調査で明らかになった遺構と遺物についてのみに絞って考えてみたい。

1. 遺構の検出状況について

本年度の調査では、縄文時代中期の住居跡1軒と奈良～平安時代の住居跡16軒を検出した。本遺跡地周辺には谷地を挟んだすぐ西側に萱野団地遺跡がある。ここでは、縄文時代中期の住居跡や平安時代の住居跡とともに、古墳時代前期の方形周溝遺構・楕円形周溝遺構・横穴式古墳が確認されている。

本年度出土した縄文時代の土器は、調査区表採のものが多く、その大半は縄文時代中期加曾利E式のものであった。縄文時代の遺構として確認できたものはJ-1号住居跡だけであった。調査区西側の試掘調査で

は、縄文時代の住居跡が複数確認された。このことから、調査区内で確認されら住居は、集落の東縁部に当たると思われる。出土した土器片等の遺物から考えて縄文前期に属する住居と推定できるが、収集できた資料が少なかったため住居の存続時期を断定するには至らなかった。

試掘調査時点で、調査区周辺には試掘トレンチが何本も入れられた。しかし前述したように、土地改良のため大部分の土地が攪拌されており、相当数の遺構が壊されてしまったようである。本遺跡の西に隣接する萱野団地遺跡で古墳時代の住居跡が40軒以上検出されたことから考えて、本遺跡地にもこの時期の遺構が存在していた可能性は否定できない。また、試掘調査の段階でも縄文土器片の散布が多くみられたことから、早くからこの地に入々の生活圏が確立していたと考えることは可能であろう。しかし、今年度は調査できた場所が限られており、判断するための材料が少ないことも事実である。本調査で遺構を検出できなかつた弥生時代から古墳時代にかけて、人々が居住していなかつたと判断するには資料が不十分であるといえよう。次年度以降の広範囲にわたる調査でより多くの資料が得られることに期待したい。

2. 住居址について

本年度は、調査区約7200m²の広さに比べ、検出された遺構・遺物の量はそれほど多くなかつた。調査区は東西約65m、南北約90mの範囲の微高地で、東にむかってなだらかに傾斜する。調査区の西端には灌漑用水路が南北に流れ、東の微高地辺縁部は幅約4mの舗装道路を挟んで表土が削り取られ一段低くなり、現在の畠面となっている。検出された住居跡は、すべて微高地の東縁斜面に位置していた。そのうち最大の規模をもつH-7号住居跡は、調査区北側部分で確認された。H-7号住居跡以外の15軒の住居跡は調査区南側に集中している。両者の距離は70~80mである。H-7号住居跡周囲に遺構は検出されておらず、遺物の散布もみられなかつた。土地改良のため削平された可能性も考えられるが、H-7号住居跡だけが他の住居の集まりから孤立して建てられたと考えるには疑問が残る。周辺、特に東側へ展開する集落の縁辺部とも考えられ、今後の調査での資料収集を待つことにしたい。

堅穴住居の規模は律令期に入り小規模化するといわれている。本遺跡の住居跡の規模をみると、最大のものは前出のH-7号住居跡で26.42m²で、最小のものはH-6号住居跡の8.59m²である。ここで述べた住居跡の面積は遺構確認面での面積であり、この面積が即住居の空間面積とはならないが、住居跡の面積を平均すると13.8m²となり、全体に小規模のものが多い。

住居跡の大半は方形で、どれも東壁中央より南に寄せて竈が造りつけられている。そして、焚口が壁面にあり、燃焼部の床面が上り勾配で長くのびる煙道に連なる。

竈の構造については、いくつか特徴的な点がみられた。まず、焚口袖部の補強のため両側に石や甕をたてたものがある。また、架けた土器の底部を支えるために支石や土器を据えたものもみられた。また、竈の構築に当たっては床面を一旦深く掘り下げ、そこに粗い土石を詰め、その上を床面としているものが多い。基盤のローム層がかなり粘性の強い細かい粒子の土層であるため、火を燃やした際に地中から上昇してくる水蒸気を遮断して、火が燃えるのを助けるための除湿構造とみられる。これらの点から、本遺跡の竈は構造的にかなり進んだ様相をみせているといえる。

集落全体の堅穴住居、掘立柱建物の配置は、調査区南東部30m×30mの範囲に集中する。この中には7軒の堅穴式住居跡と10棟の掘立柱遺構があり、その濃密さがわかる。周辺には遺構がない空閑地があることからすると、人々の居住できる空間にはある種の規制があったのかもしれない。また、H-13・14号住居跡、H-16・17号住居跡、H-8号住居跡、B-6号掘立柱建物遺構のように、建てられた位置が重複関係にある。

るものがあり、この集落が長期にわたり存続したことを裏付けている。

一方、個々の住居跡自体にも特徴的なものがある。挙げてみると、H-1号住居跡では北壁部分に張出部分が備えられていた。H-2号住居跡には、竈の前部に粘土溜まりがあった。また、H-3号住居跡では、東壁の北側に住居の壁を拡幅した棚状の施設が確認された。このような施設は居住空間をできるだけ広く取り、作業空間や貯蔵空間を生み出すための人々の工夫の結晶だったのかもしれない。

3 挖立柱建物遺構について

掘立柱とは、礎石を用いずに木造建築の柱を直接土坑内に立てる方式をいう。伊勢神宮などにみられるように上代建築の一般的な方法であったらしく、平安初期までの建物にその例が多い。本年度の調査では、遺構確認面で多くの大小土坑が検出されたが、何らかの構造物の痕跡と確認できたものは10棟の掘立柱建物だけである。その他の土坑については埋没土に一定のパターンを見出せるものの、その配列や深さに企画性や意図をみてとれど、掘立柱建物や櫛列としての可能性は少ないと考えられる。

今年度調査で確認された掘立柱建物遺構は、柱穴の配置から二つに分けられる。すなわち梁間2間・桁行3間のB-8号遺構と梁間2間・桁行2間のB-8号以外の遺構である。10棟の遺構のうちB-8号1棟だけが2間×3間の間取りで10基の柱穴が長方形に配置されるつくりとなっている。他の9棟は、2間×2間の間取りで8基の柱穴が正方形に近い長方形に配置されるつくりとなっている。しかし、建物内側に柱を配する総柱造りの建物は、今回の調査では確認されなかった。

居住という用途にのみ使われる竪穴住居とは異なり、掘立柱建物の用途は多岐にわたるといわれている。しかし、今回の調査で確認された掘立柱建物遺構からは出土遺物がほとんど無く、建物の時期や用途を推定できるような資料を得ることはできなかった。しかし、B-6号遺構に関してはH-8号住居との重複関係があり、存続時期を窺うことができた。柱穴がH-8号住居の床を掘り抜いていたことから、B-6号遺構はH-8号住居の埋没土を掘り込んでつくられたと考えられる。H-8号住居は10世紀初頭の遺構であると推定されることから、B-6号掘立柱建物遺構はそれ以降につくられたものであると考えられよう。

掘立柱建物の用途に関しては、遺構の規模から考えることができる。掘立柱建物は竪穴住居より構造的に進歩した建物である。このうち、B-8号のみが桁行3間・梁間2間の構造をもつ。他の建物は、2間×2間の構造である。その面積をみるとB-8号が $28.4m^2$ で、他は平均 $17.4m^2$ である。(Tab. 2 参照) 一方、竪穴住居の規模は平均 $13.8m^2$ である。(Tab. 1 参照) 各遺構の規模を比較してみると、B-8号が突出して大きいことがわかる。推定の域を脱しないが、B-8号は集落の中心となるような人物に関係した建物の遺構なのかもしれない。そして、集落中の一画に掘立柱建物を中心に生活する有力な人々の一群があり、その周辺に竪穴住居に生活する人々が配置される集落である可能性も窺うことができよう。掘立は住居の他、兼営的のものも含むかもしれない。

4 出土遺物について

本年度調査では、8世紀末から10世紀、奈良時代後期から平安時代にかけての土器が、数多く出土している。その他、縄文土器片や石器・石製品・鉄製品なども確認されている。出土点数が多いとはいえないが、これらの遺物は、早い時期からこの地に人々の営みが続いてきたことを窺わせる貴重な資料となった。

出土点数が一番多かったものは土師器・須恵器の壺である。出土した土師壺は、平底のものが多い。また、口縁部は内湾するものもみられたが外反するものの比率が高かった。土師壺は8世紀前半までは丸底のもの

が多いが、後半では平底化していく傾向にある。また、口縁部は8世紀前半までは内湾するものが主であるが、後半には外反化していく傾向にある。本年度調査で出土した土師环は、8世紀後半の特徴をもつものが大半を占めた。一方、須恵环は、口径が12~13cm、器高が3.5~4cm前後で、底部の成形は「回転糸切り未調整」のものが多かった。これは9世紀代の須恵环の特徴がよく現れていた。

本年度確認された須恵器の特徴は、本遺跡地の北東に位置する上大量・梗越地区遺跡群のもと類似点が多い。この遺跡では、八ヶ峰生産址遺構で須恵器窯跡の存在が確認されている。この窯跡は東毛地区で有名な金山の窯跡ほど大規模なものではないので、多方面に須恵器を供給していたとはいえないであろう。しかし、距離が比較的近い本遺跡地に須恵器が供給されていたとしても、不思議はないであろう。

9世紀末になると、酸化焰焼成須恵器が出回るようになってくる。この焼成方法は、环だけの器形にとどまらず、碗でもみられる。本年度調査では、住居跡から5点の酸化焰焼成須恵器の环と4点の酸化焰焼成須恵器高台付碗が確認された。酸化焰焼成須恵器のものも含んだ高台付碗の出土点数は、环類に次いで多かった。高台付碗は9世紀に入ると供膳の主要な位置を占めるようになり、10世紀には量的に豊富に出回る器形となる。

出土点数は少なかったが、煮炊きなどに用いた土師甕も出土した。全体に器肉が薄く、箇削りが施されている。口縁から頸部の断面は「コ」の字型を呈していて、胴部上位に最大径をもつ。これは9世紀後半の土師甕の特徴をよく表している。

出土点数はさらに限定されてしまうが、墨書が施された土器片などの特殊遺物が、何点か出土しているので、これらについても考えてみたい。

墨書が施された土器片は、2点確認されている。1点は試掘調査の際、調査区近くのトレンチから見つかった。断片であるため文字の判読、或いは絵の解明はできなかった。もう1点はH-2号住居跡の埋没土中から見つかった。これも断片であったが、「田」という文字が看取できた。本遺跡地の西側に隣接する萱野団地遺跡でも、平安時代の住居跡から墨書き土器片が見つかっているが、出土点数は少ない。一方、奈良時代には、唐代の中国から身分を表すためのベルト、鈎帯がもたらされた。鈎帯には長方形の巡方とよばれる銅製品もしくは石製品が付けられる。本年度調査では、H-14号住居跡から石製巡方が見つかっている。この巡方は良質とはいえない蛇紋岩製であったが、こうしたものの所有者がこの地にいたことは確かなようである。

5 遺跡地集落の変遷について

以上、1~4まで確認された遺構や遺物についてみてきた。これらを総合してみると、本遺跡地における集落の変遷について次の2点を挙げられよう。

まず第一に、この集落が一番充実した時期は、9世紀後半から10世紀の初めの頃ではないかということである。この時期に該当すると推定される遺構は、住居跡では、H-1・3号。掘立柱建物遺構では、B-1・4・6・8・10号である。この数は、住居跡・掘立柱建物遺構全体の1/4にあたり、この時期に建物が比較的多かったことがわかる。この時期の集落では、竪穴式住居と掘立柱建物が建ち並んだ家並みがみられたことであろう。また、本遺跡地最大の規模をもつB-8号掘立柱建物を中心に建物の並びを考えることができる。B-8号とB-1号の西側の柱穴列やB-1号とB-4号の北側の柱穴列は、図面上では一直線に結ぶことができる。こうして集落の姿を考えると、東に向くB-8号建物と建物北側に2棟の倉庫(雜倉)が並ぶ「く」の字型の家並みが浮かんでくる。本年度の調査ではB-8号遺構の南側に掘立柱建物遺構を確認できなかったが、もししかしたら北側と同じように掘立柱建物が並んだ「コ」の字型の家並みだったのかもしれない。

ない。

第二に、本遺跡の集落は8世紀の終わり頃から10世紀にかけての約200年間、存続していたのではないかということである。本年度の調査は調査面積が限定される中で行なわれたため来年度以降の調査と整合性を図らねばならない。しかし遺構の検出状況や出土遺物から考えると、少なくともこの期間、集落が存続していたと考えて差し支えないと思われる。しかしながら、本年度が本遺跡調査の糸口である以上、詳細の解明については今後の調査の進捗と資料の収集を待つことにしたい。

《主要参考文献及び引用文献》

- 「前橋市史 第一巻」 前橋市史編さん委員会 1971
「日本土器事典」 大川 清・鈴木公雄・工渠善通 1996
「群馬県出土の墨書・刻畫土器集成(1)」 群馬県教育委員会 1989
「奈良・平安時代の土器の編年—住居の重複と共伴関係による土器型式組列の検討ー」
群馬県史研究 第24集 群馬県史編さん委員会 1986
研究紀要5 (財)群馬県埋蔵文化財発掘調査団 1988
「萱野・下田中・矢場遺跡」 群馬県企業局 1991
「新保田中村前遺跡III」 (財)群馬県埋蔵文化財発掘事業団 1993
「柳久保遺跡群I」 前橋市教育委員会 1984
「芳賀東部地区遺跡I」 芳賀闇地造成地内埋蔵文化財発掘調査団 1984
「丸山・北田下・中畑・村主・中山B」 群馬県教育委員会 1988
「西大室丸山遺跡」 群馬県教育委員会 1997
「諏訪西遺跡・諏訪遺跡・柳久保遺跡」 群馬県教育委員会 1998
「荒砥北三木堂遺跡II」 (財)群馬県埋蔵文化財発掘事業団 1992
「上大屋・楢越地区遺跡群」 大胡町教育委員会 1986
「上大屋南部地区遺跡群」 大胡町教育委員会 1999
「分郷八幡遺跡」 群馬県北橘村教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団 1986
「房谷戸遺跡I」 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財発掘事業団 1989

Tab. 3 遺物觀察表

番号	出土位置	形態	大きさ				①地土・②陶器・③色調・④既存	器形・製作技術の特徴	備考	P.g.
			口径	高さ	幅	厚さ				
1	A区3トレス	土師杯	-	(0.5)	①縦肋・②赤・③青・④既存破片	外縫織ナダ。内面糊ナダ。	高密度土	23		
2	B区3トレス	土師杯	[13.2]	3.4	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。内面糊ナダ。	23			
3	B区2トレス	漆器高台杯	-	(12.3)	①縦肋・②赤・③青・④既存	23				
4	D区9トレス	土師杯	15.6	3.05	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。既存リ。内面糊ナダ。	23			
5	A区2トレス	火薬瓶	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。	前期初頭	23		
6	A区2トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。	既存初頭	23		
7	A区11トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。後に押絵文	既存	23		
8	A区11トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。	既存	23		
9	A区11トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	地文に既存RL。後に押絵文	既存	23		
10	A区11トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	0(ゼロ)枚多。既存RL。	既存	23		
11	A区11トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。五面三文式。	中期	23		
12	A区5トレス	把子	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	把子部分	中期	23		
13	A区5トレス	漆杯	[22.6]	(6.5)	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。既存リ。既存リ。既存	中期	23		
14	A区5トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。	既存	23		
15	A区5トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	23		
16	B区2トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存リ。	中期	23		
17	B区11トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	地上の違う敷石による既存文。既存RL。既存	前期	23		
18	B区11トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。	中期	23		
19	B区11トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。	中期	23		
20	B区5トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	中期	23		
21	B区5トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。	中期	23		
22	C区2トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。	中期	23		
23	C区5トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	半井竹管による既存	前期	24		
24	C区5トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	半井竹管による既存	既存	24		
25	D区5トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	半井竹管による既存	既存	24		
26	D区5トレス	角	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。	既存	24		
27	D区5トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
28	D区5トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
29	D区5トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。	既存	24		
30	D区5トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
31	D区5トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
32	D区5トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
33	D区5トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。	既存	24		
34	D区10トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。	既存	24		
35	D区10トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。	既存	24		
36	D区11トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
37	E区5トレス	漆杯	[13.4]	(14.2)	①縦肋・②赤・③青・④既存	半井竹管による既存文(ゼロ)段多条。既存RL。	前期	24		
38	E区5トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。	既存	24		
39	E区11トレス	口縁	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存口縁	既存	24		
40	E区11トレス	口縁	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。	既存	24		
41	E区11トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。	既存	24		
42	H区7トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。	既存	24		
43	A区2トレス	石盤	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
44	B区1トレス	石盤	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
45	B区1トレス	石盤	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
46	A区2トレス	打継石斧	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
47	B区5トレス	打継石斧	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
48	B区5トレス	打継石斧	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
49	D区7トレス	石斧	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
50	G区12トレス	打継石斧	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
51	A区3トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
52	A区3トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
53	A区3トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
54	A区4トレス	漆杯	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
55	B区1トレス	四石	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
56	E区3トレス	四石	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	既存RL。既存リ。	既存	24		
57	H-1	黒化粧成層灰瓦	[14.8]	(4.3)	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。内面糊ナダ。	26			
58	H-1	土師甕	[18.8]	(19.7)	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。瓦割り。内面糊ナダ。ナダ。	26			
59	H-1	土師甕	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。内面糊ナダ。	26			
60	H-2	土師甕	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。内面糊ナダ。	26			
61	H-2	黒化粧成層灰瓦	[13.3]	(4.0)	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。内面糊ナダ。	26			
62	H-2	黒化粧成層灰瓦	[13.0]	4.5	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。内面糊ナダ。	26			
63	H-3	土師甕	[11.8]	(3.9)	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。ナダ。内面糊ナダ。	26			
64	H-3	土師甕	-	-	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。ナダ。	26			
65	H-3	黒化粧成層灰瓦	[11.9]	3.7	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。内面糊ナダ。	26			
66	H-3	土師甕	[20.3]	9.1	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。内面糊ナダ。ナダ。	26			
67	H-3	土師甕	[20.4]	(26.1)	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。瓦割り。内面糊ナダ。ナダ。	電の土筋	26		
68	H-3	土師甕	[11.6]	(25.3)	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。瓦割り。内面糊ナダ。ナダ。	付帯	26		
69	H-3	土師甕	[11.8]	(4.8)	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。瓦割り。内面糊ナダ。ナダ。	付帯	27		
70	H-3	土師甕	-	(5.7)	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。瓦割り。瓦割り。内面糊ナダ。	付帯	27		
71	H-3	土師甕	-	(9.0)	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。瓦割り。内面糊ナダ。ナダ。	付帯	27		
72	H-3	土師甕	-	11.1	①縦肋・②赤・③青・④既存	外縫織ナダ。内面糊ナダ。	付帯	27		

番号	出土位置	器 形	大きさ 口径 直高		①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形・製作法の特徴	備 考	Pig
			口径	直高				
73	H-3	土師壺	[19.4]	27.3	①胎土 ②焼成 ③黄褐色 ④破片	外側焼ナデ、裏削り。内面焼ナデ、ナデ。	布目付い、 たれ土付着。	27
74	H-3	土師壺	[20.0]	29.0	①胎土 ②焼成 ③灰 ④A/S	外側焼ナデ、裏削り。内面焼ナデ、ナデ。	27
75	H-4	土瓶壺	[13.0]	3.2	①胎土 ②焼成 ③白 ④破片	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	27
76	H-4	土瓶壺	[11.5]	2.8	①胎土 ②焼成 ③白 ④破片	外側焼ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	27
77	H-4	土瓶壺	-	(1.2)	①胎土 ②焼成 ③白 ④破片	外側焼ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	27
78	H-4	土瓶壺	[25.3]	(16.9)	①胎土 ②焼成 ③白 ④破片	外側焼ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	27
79	H-5	土細壺	[12.7]	(2.9)	①胎土 ②焼成 ③白 ④破片	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	28
80	H-5	土瓶壺	11.5	3.5	①胎土 ②焼成 ③青灰 ④破片	外側焼ナデ、ナデ。内面焼ナデ。	28
81	H-5	土瓶壺	11.8	3.0	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付完形	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	28
82	H-5	土瓶壺	[13.1]	3.4	①胎土 ②焼成 ③白 ④破片	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	28
83	H-6	軟化燒成窯窓高 台付壺	[19.5]	(5.6)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	28
84	H-6	軟化燒成窯窓高 台付壺	[19.5]	(6.1)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	28
85	H-6	軟化燒成窯窓高 台付壺	[14.6]	(5.1)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	28
86	H-7	土瓶壺	[12.5]	(3.6)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ、ナデ。	28
87	H-7	土瓶壺	[12.8]	3.8	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	28
88	H-7	土瓶壺	[14.6]	(3.9)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	28
89	H-7	土瓶壺	[13.4]	(3.0)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	28
90	H-7	土瓶壺	[13.2]	3.5	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	28
91	H-7	土瓶壺	[13.6]	2.6	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	28
92	H-7	土瓶壺	[14.0]	(4.1)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	28
93	H-7	土瓶壺	[13.0]	2.8	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	28
94	H-7	土瓶壺	12.1	3.2	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ、ナデ。	28
95	H-7	土瓶壺	[12.4]	2.9	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	28
96	H-7	土瓶壺	[11.6]	(3.3)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	28
97	H-7	土瓶壺	[15.0]	(8.1)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	28
98	H-7	土瓶壺	-	(1.3)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	28
99	H-7	土瓶壺	-	(1.3)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	28
100	H-7	土瓶壺	[12.6]	4.3	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	28
101	H-7	土瓶壺	13.8	3.5	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	28
102	H-7	土瓶壺	[13.4]	3.7	①胎土 ②焼成 ③灰 ④白 ⑤白片	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	28
103	H-7	土瓶壺	-	(1.6)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④白 ⑤白片	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	28
104	H-7	土瓶壺	[14.0]	3.95	①胎土 ②焼成 ③灰 ④白 ⑤白片	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	28
105	H-8	土瓶壺	[11.6]	(2.7)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ。ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	29
106	H-8	土瓶壺	-	(1.9)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④リニア ⑤施墨のみ	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	29
107	H-8	軟化燒成窯窓高 台付壺	-	(2.0)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④施黄鐵 ⑤墨のみ	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	29
108	H-8	软地高台付壺	[19.2]	3.0	①胎土 ②焼成 ③灰 ④リニア ⑤A/S	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	29
109	H-8	土瓶壺	[14.8]	(7.7)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	29
110	H-8	软地高台付壺	-	(2.1)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ。ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	29
111	H-8	软地高台付壺	[14.7]	5.7	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ。ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	29
112	H-8	土瓶壺	[10.0]	(8.4)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	29
113	H-9	土瓶壺	[11.7]	5.7	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	29
114	H-9	土瓶壺	11.8	8.1	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付完形	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	29
115	H-9	土瓶壺	[10.6]	(5.2)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	29
116	H-10	土瓶壺	[12.4]	3.4	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	29
117	H-10	土瓶壺	[11.6]	(2.7)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	29
118	H-10	土瓶壺	[12.4]	3.7	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	29
119	H-11	土瓶壺	[12.0]	(2.4)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	29
120	H-11	土瓶壺	[12.0]	4.9	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	29
121	H-11	软地高台付壺	[14.4]	5.4	①胎土 ②焼成 ③灰 ④A/S	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	29
122	H-11	土瓶壺	-	(4.0)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④台ののみ	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	29
123	H-12	土瓶壺	[13.4]	6.1	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	29
124	H-12	土瓶壺	[14.6]	4.6	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	29
125	H-12	土瓶壺	[12.3]	3.4	①胎土 ②焼成 ③灰 ④白 ⑤白片	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	29
126	H-12	土瓶壺	[19.4]	(6.3)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	29
127	H-12	软地高台付壺	-	(2.8)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	29
128	H-12	土瓶壺	[19.4]	(17.1)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④破片	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	29
129	H-12	土瓶壺	[17.5]	(25.8)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	29
130	H-12	土瓶壺	[19.7]	(28.5)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	29
131	H-13	土瓶壺	[12.6]	5.2	①胎土 ②焼成 ③灰 ④有孔柱付	外側焼ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	30
132	H-13	土瓶壺	[15.3]	2.4	①胎土 ②焼成 ③灰 ④A/S	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	30
133	H-13	土瓶壺	[17.0]	(3.9)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④白 ⑤白片	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	30
134	H-13	土瓶壺	[12.2]	5.7	①胎土 ②焼成 ③灰 ④A/S	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	30
135	H-13	土瓶壺	[12.4]	4.3	①胎土 ②焼成 ③灰 ④白 ⑤白片	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	30
136	H-13	土瓶壺	[12.4]	3.2	①胎土 ②焼成 ③灰 ④白 ⑤白片	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	30
137	H-13	软地高台付壺	[12.8]	5.1	①胎土 ②焼成 ③灰 ④白 ⑤白片	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	30
138	H-13	土瓶壺	[21.1]	(25.0)	①胎土 ②焼成 ③灰 ④白 ⑤白片	外側焼ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	30
139	H-14	土瓶壺	[12.3]	3.4	①胎土 ②焼成 ③灰 ④白 ⑤白片	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	31
140	H-16	土瓶壺	[12.2]	3.9	①胎土 ②焼成 ③灰 ④白 ⑤白片	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	31
141	H-16	土瓶壺	-	2.6	①胎土 ②焼成 ③灰 ④白 ⑤白片	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	31
142	H-16	土瓶壺	[11.6]	3.1	①胎土 ②焼成 ③灰 ④白 ⑤白片	外側焼ナデ、ナデ、裏削り。内面焼ナデ。	31
143	H-16	土瓶壺	[19.4]	[11.6]	①胎土 ②焼成 ③灰 ④白 ⑤白片	外側焼ナデ。内面焼ナデ。	31

番	出土位置	器 形	大きさ	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	断面・製作法の特徴	備 考	Fg
			口径 厚さ				
144	H-16	鹿島高台付焼	- (3.7)	①焼物②丸③灰褐色片	外表面緑ナデ、内面黒褐色ナデ。	:	31
145	H-16	鹿島窓	[13.6] (4.0)	①焼物②丸③灰褐色片	外表面緑ナデ、内面黒褐色ナデ。	:	31
146	H-16	鹿島小窓	[19.4] (5.3)	①焼物②丸③灰褐色片	外表面緑ナデ、内面黒褐色ナデ。	:	31
147	H-17	土器環	[12.6] (3.3)	①焼物②丸③灰褐色片	外表面緑ナデ、内面黒褐色ナデ。	:	31
148	H-17	鹿島环	[12.0] (3.1)	①焼物②丸③灰褐色片	外表面緑ナデ、内面黒褐色ナデ。	:	31
149	H-17	鹿島陶器環窓	[13.5] (4.1)	①焼物②丸③灰褐色片	外表面緑ナデ、内面黒褐色ナデ。	:	31
150	H-17	鹿島环	[15.6] (3.4)	①焼物②丸③灰褐色片	外表面緑ナデ、内面黒褐色ナデ。	:	31
151	H-17	鹿島高台付焼	[15.8] (5.2)	①焼物②丸③灰褐色片	外表面緑ナデ、内面黒褐色ナデ。	:	31
152	H-17	土器環	[20.0] (5.8)	①焼物②丸③灰褐色片	外表面緑ナデ、内面黒褐色ナデ。	:	31
153	H-17	土器環	[14.5] (6.7)	①焼物②丸③灰褐色片	外表面緑ナデ、内面黒褐色ナデ。	:	32
154	H-17	土器台付環	[12.8] (3.1)	①焼物②丸③灰褐色片	外表面緑ナデ、内面黒褐色ナデ。	:	32
155	D-1	土器環	18.6 (23.4)	①焼物②丸③灰褐色片	外表面緑ナデ、残すり。内面黒褐色ナデ、ナデ。	世紀第4半期	32
156	H-17	土器品	42.7 (9.3)	①焼物②丸③灰褐色片	外表面緑ナデ、残すり。内面黒褐色ナデ、ナデ。	:	32
157	H-14	石製刀	-	①焼物②丸③灰褐色④彫形	外表面緑ナデ、残すり。内面黒褐色ナデ、ナデ。	蛇形:	32
158	H-8	鉈鋸末	44.7~ (2.1)	①焼物②丸③灰褐色④彫形	外表面緑ナデ、残すり。内面黒褐色ナデ、ナデ。	:	32
159	J-1	深鉈	(14.4)	①焼物②丸③灰褐色片	0(ゼロ)段多条、圓文R.L.	鶴嘴: 開山	33
160	J-1	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.、斜行鉈文	:	33
161	J-1	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.	:	33
162	X114, Y96	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.	前期: 黒斑	33
163	X115, Y95	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	0(ゼロ)段多条、圓文R.L.	前期: 黒斑	33
164	鹿島区深鉈	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.	前期: 黒斑	33
165	X120, Y101	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.、手執竹管による模様・連続爪形文	前期: 黒斑	33
166	X121, Y95	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.、手執竹管による模様・連続爪形文	前期: 黒斑	33
167	X122, Y96	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.	前期: 黒斑	33
168	X123, Y99	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.、手執竹管による模様・連続爪形文	前期: 黒斑	33
169	X124, Y98	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.	前期: 黒斑	33
170	X124, Y100	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.	前期: 黒斑	33
171	X125, Y98	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.	前期: 黒斑	33
172	X125, Y99	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.、手執竹管による模様・連続爪形文	前期: 黒斑	33
173	X126, Y99	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.、手執竹管による模様・連続爪形文	前期: 黒斑	33
174	X127, Y99	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.	前期: 黒斑	33
175	X128, Y99	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.、手執竹管による模様・連続爪形文	前期: 黒斑	33
176	X129, Y98	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.	前期: 黒斑	33
177	X130, Y100	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.	前期: 黒斑	33
178	X131, Y98	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.	前期: 黒斑	33
179	X131, Y93	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.	前期: 黒斑	33
180	X139, Y96	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.、手執竹管による模様・連続爪形文	前期: 黒斑	33
181	X139, Y90	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.	前期: 黒斑	33
182	X139, Y91	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.	前期: 黒斑	33
183	X139, Y98	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	圓文R.L.	前期: 黒斑	33
184	X135, Y100	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	半手执竹管による模様・連続爪形文。略文は圓文L.	前期: 游傍b	33
185	X134, Y96	深鉈	-	①焼物②丸③灰褐色片	連続爪形文、玉抱三文叉	中期: 游傍	33
186	H-2	打削石铲	-	⑨. X326. 93.1. 003(0.5) ⑥. 灰褐色質	一部自然面を残す。	:	34
187	J-1	打削石铲	-	⑩. X326. 92.0. 003(0.5) ⑤. 灰褐色質	一部自然面を残す。	:	34
188	X119, Y96G	打削石铲	-	⑪. X326. 72.0. 003(0.5) ④. 灰褐色質	一部自然面を残す。	:	34
189	X124, Y96G	打削石铲	-	⑫. X326. 92.0. 003(0.5) ④. 灰褐色質	一部自然面を残す。	:	34
190	X126, Y96	打削石铲	-	⑬. X326. 15.0. 003(0.5) ④. 灰褐色質	一部自然面を残す。	:	34
191	X131, Y91G	打削石铲	-	⑭. X326. 92.0. 003(0.5) ④. 灰褐色質	一部自然面を残す。	:	34
192	H-12	削器	-	⑮. X327. 93.1. 003(0.5) ④. 灰褐色質	一部自然面を残す。	:	34
193	X138, Y102G	削器	-	⑯. X326. 42.0. 003(0.5) ④. 灰褐色質	自然面を残す。	:	34
194	X125, Y96G	削器	-	⑮. X422. 6.0. 0. 003(0.5) ④. 鹿島灰褐色質	自然面を残す。	:	34
195	H-7	磨石	-	⑯. X723. 3.0. 0. 003(0.5) ④. 鹿島灰褐色質	4面使用。	:	35
196	H-9	磨石	-	⑮. X623. 9.0. 0. 003(0.5) ④. 鹿島灰褐色質	4面使用。	:	35
197	H-13	磨石	-	⑯. X624. 9.0. 0. 003(0.5) ④. 鹿島灰褐色質	4面使用。	:	35
198	H-1	凹石	-	⑩. X10. 10. 0. 003(0.5) ④. 灰褐色質	自然面を残す。	:	35
199	X119, Y96G	凹石	-	⑯. X10. 02. 0. 003(0.5) ④. 灰褐色質	自然面を残す。	:	35
200	H-4	磨石	-	⑯. X823. 9.0. 0. 003(0.5) ④. 鹿島灰褐色質	自然面を残す。	:	35
201	H-5	磨石	-	⑯. X16. 52. 0. 0. 003(0.5) ④. 鹿島灰褐色質	自然面を残す。	:	35
202	X117, Y100G	磨石	-	⑯. X11. 30. 0. 0. 003(0.5) ④. 鹿島灰褐色質	自然面を残す。	:	35
203	J-1	磨石	-	⑯. X22. 19. 0. 0. 003(0.5) ④. 鹿島灰褐色質	自然面を残す。	:	36
204	J-1	磨石	-	⑯. X16. 85. 0. 0. 003(0.5) ④. 鹿島灰褐色質	自然面を残す。	:	36
205	J-1	凹石	-	⑯. X17. 70. 0. 0. 003(0.5) ④. 鹿島灰褐色質	自然面を残す。	:	36
206	J-1	磨石	-	⑯. X17. 42. 0. 0. 003(0.5) ④. 鹿島灰褐色質	自然面を残す。	:	36
207	X119, Y100G	石底	-	⑯. X17. 20. 0. 0. 0. 003(0.5) ④. 鹿島灰褐色質	自然面を残す。	:	36

註 1. 織文土器・土師器・須恵器の観察項目は、「①胎土②焼成③色調④残存」の順で記載した。

2. 石器・石製品の観察項目は「①最大長②最大幅③最大厚④重さ⑤石材」の順で記載した。

3. ①胎土は細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0mm～1.9mm）、粗粒（2.0mm以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合には、鉱物名を記載した。

②焼成は、「極良・良好・不良」の3段階で評価した。

③色調は土器外部を観察し、色名は新版標準土色帳（小山・竹原1976）によった。

④大きさの単位はcm・gであり、現存値を（ ）、復原値を〔 〕で示した。その他の小片についても所属部位を記載した。

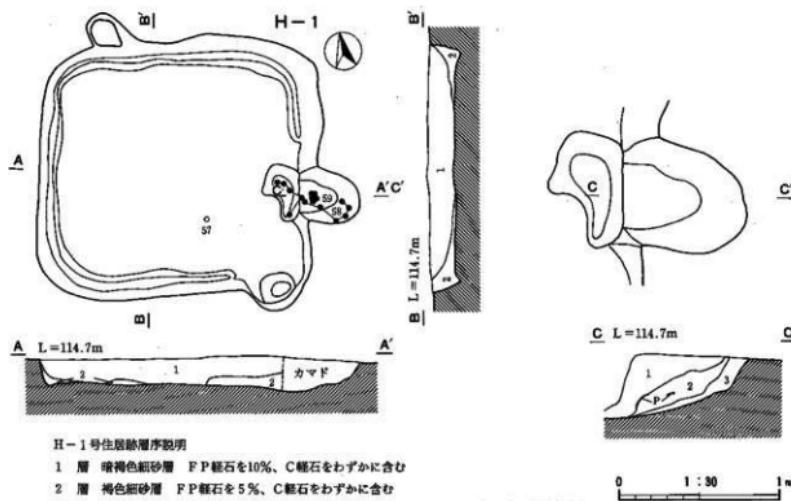
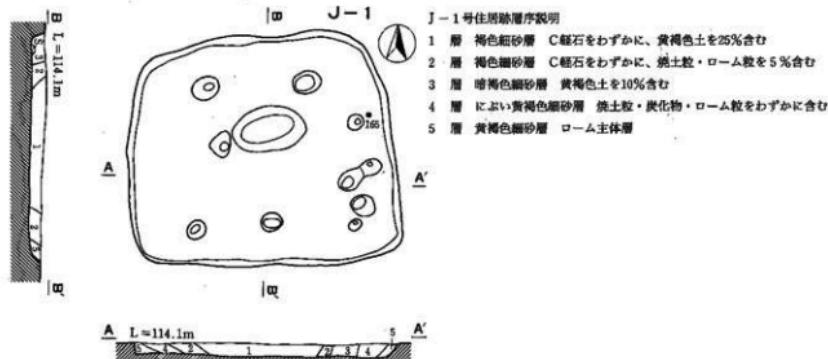


Fig. 7 J-1・H-1号住居跡

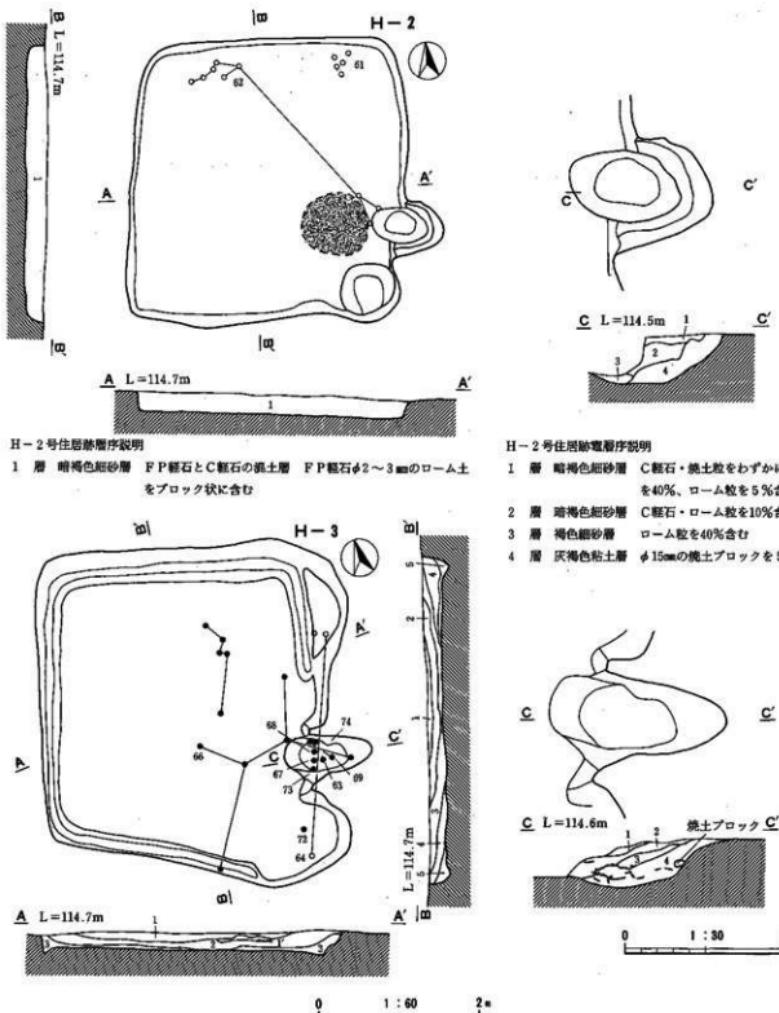
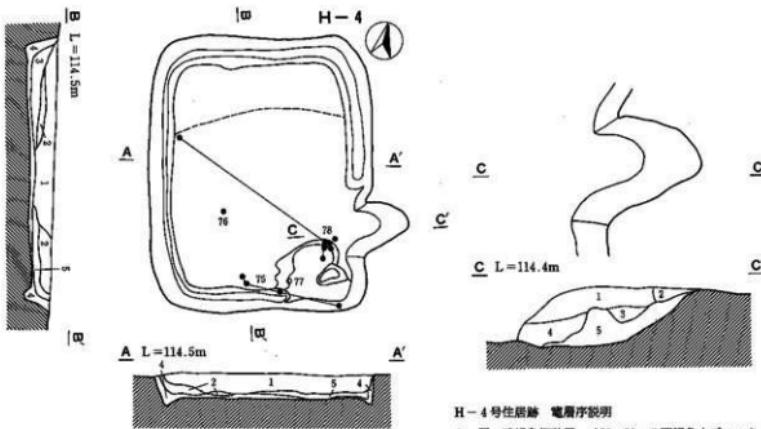
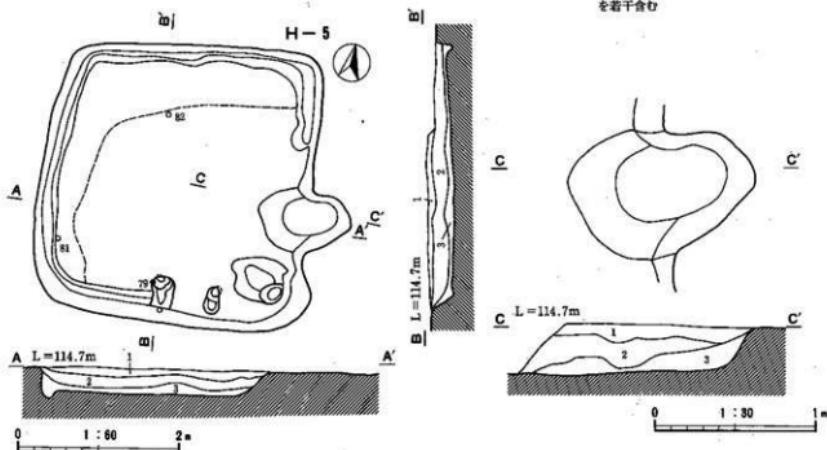


Fig. 8 H-2・3号住居跡



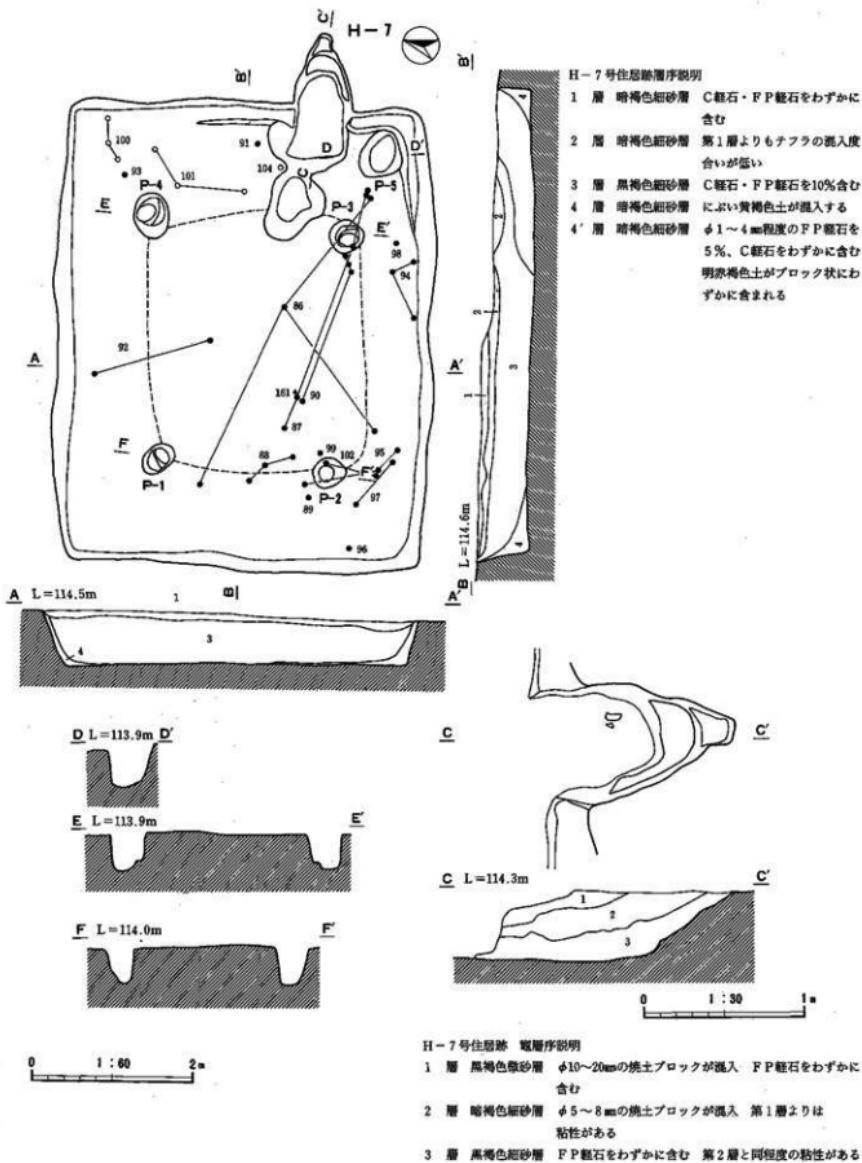
H-4号住居跡 電層序説明

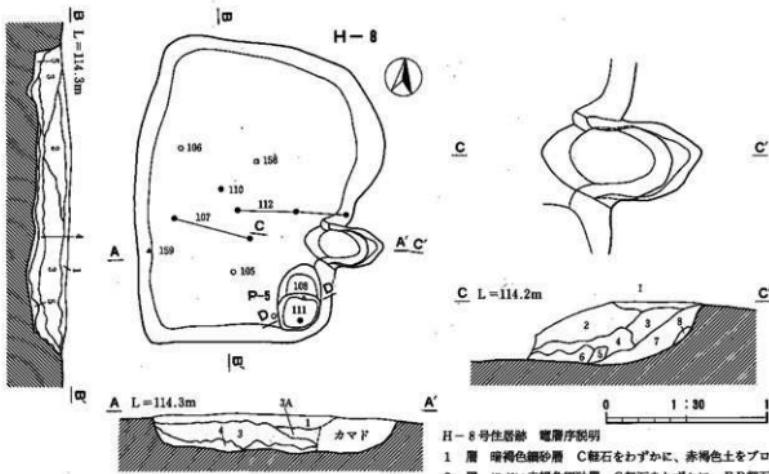
- 1 層 暗褐色細砂層 $\phi 20\sim30$ mmの明褐色土ブロック・わずかな焼土を含む
- 2 層 暗褐色細砂層 焼土が下層部に点在する
- 3 層 暗褐色細砂層 粘土を含む
- 4 層 暗褐色細砂層 $\phi 30$ mmの明褐色土ブロックを含む
- 5 層 透褐色細砂層 $\phi 20$ mmの明褐色土ブロックを含む 下層部に焼土が点在する 上層部は褐色に変化している 粘土を若干含む



H-5号住居跡 電層序説明

- 1 層 暗褐色細砂層 F P軽石・ローム粒を含む
- 2 層 暗褐色細砂層 F P軽石を5%、C軽石・焼土をわずかに含む
- 3 層 褐色細砂層 $\phi 10$ mmのロームブロックを含む 上層には第2層の混入が認められる





H-8号住居跡層序説明

- 層 暗褐色細砂層 F P軽石を多量に含む
- 層 暗赤褐色細砂層 F P軽石を多量に、焼土ブロックをわずかに含む
- 層 暗褐色細砂層 F P軽石10%、部分的に褐色細砂を含む
- A層 第3層より褐色細砂の混入度合いが高い
- 層 黒褐色細砂層 部分的に褐色細砂を含む
- 層 黄褐色細砂層 上層部は第4層の土の影響があり変色している

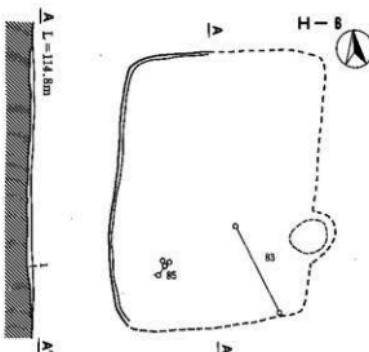
H-8号住居跡 地層序説明

- 層 暗褐色細砂層 C軽石をわずかに、赤褐色土をブロック状に含む
- 層 にい赤褐色細砂層 C軽石をわずかに、F P軽石を10%含む
暗褐色土ブロックが点在
- 層 にい赤褐色細砂層 <40mmの赤褐色土ブロック混入 F P軽石をわずかに含む
- 層 暗赤褐色細砂層 F P軽石をわずかに、下層部には焼土を含む
- 層 暗赤褐色細砂層 全体的に焼けている
- 層 暗赤褐色細砂層 第5層の焼土が極わずかに点在する
- 層 暗赤褐色細砂層 混入物無し
- 層 褐色細砂層 混入物・テフラ無し



H-8 P層序説明

- 層 黒褐色粘質土 テフラ無し
- 層 黄褐色細砂 テフラ無し



H-6号住居跡層序説明

- 層 暗褐色細砂層 ロームと暗褐色土との混成層
暗褐色土中にC軽石・F P軽石を10%含む

Fig. 11 H-6・8号住居跡

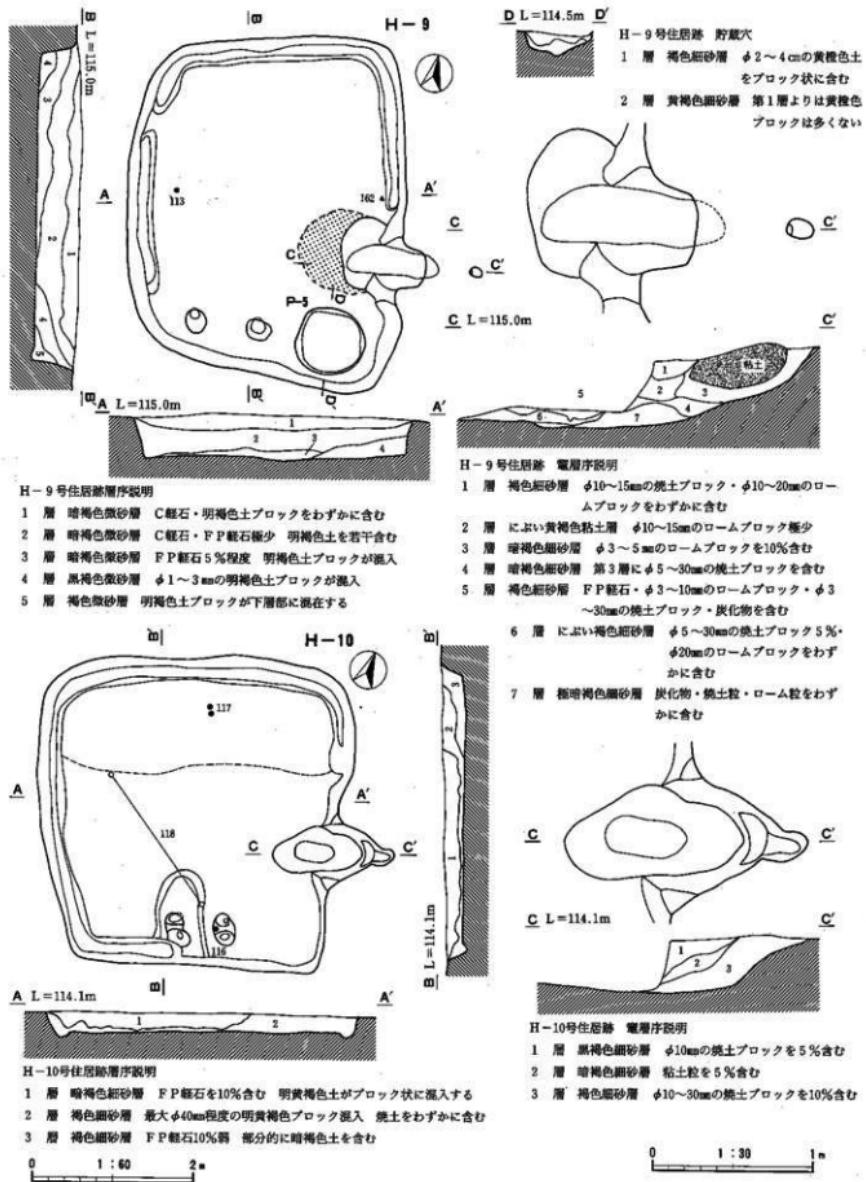
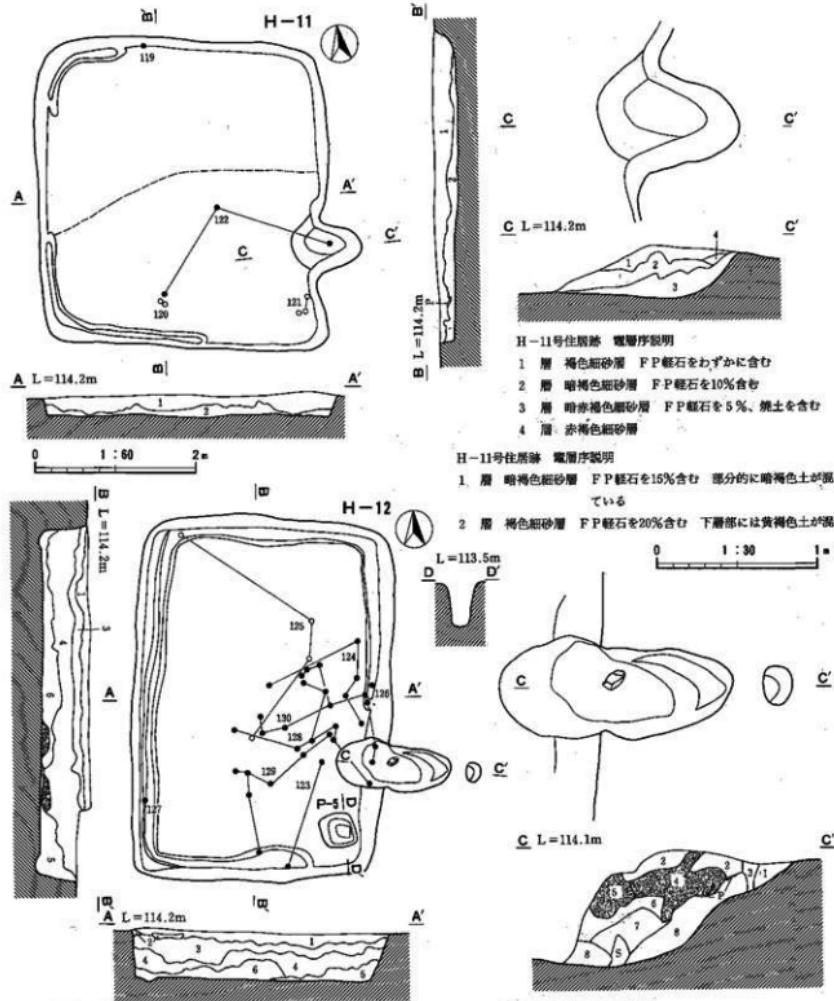


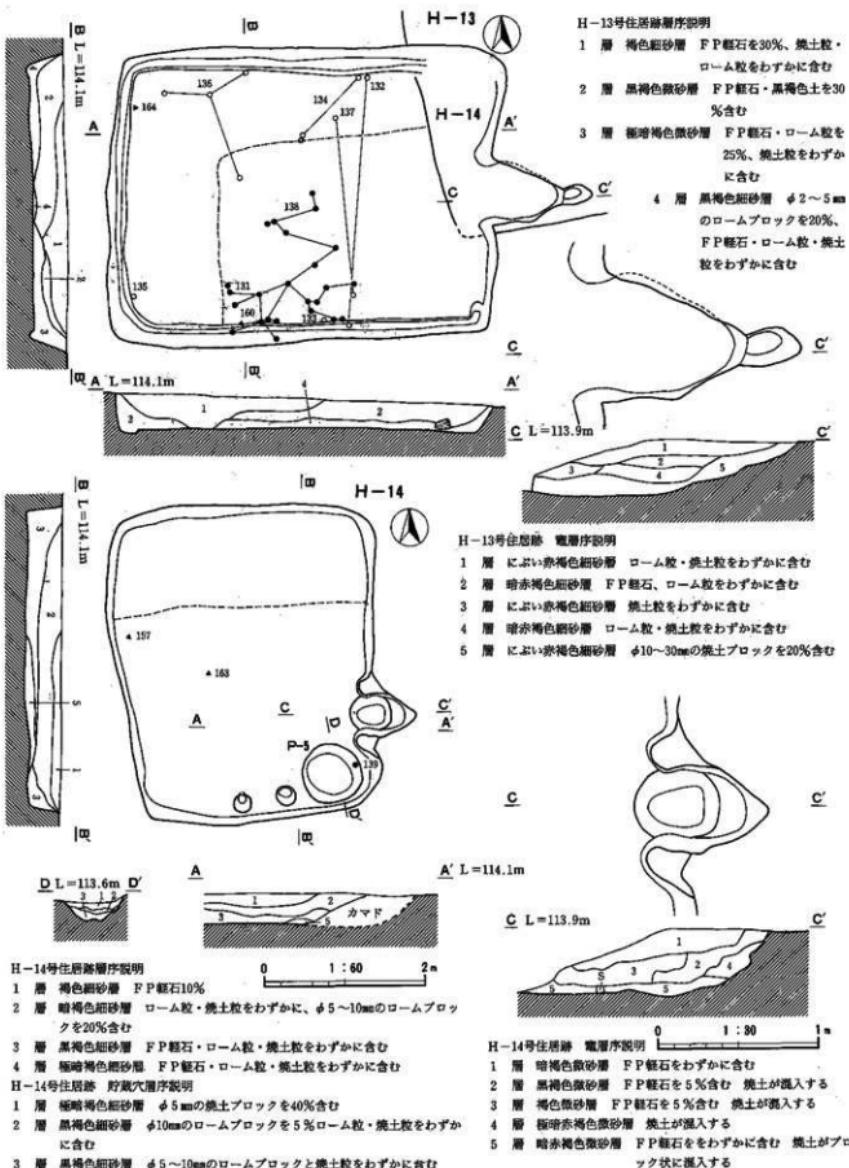
Fig. 12 H-9 + 10号住居跡



H-12号住居跡 電層序説明

- 黒褐色細砂層 F P 粟石を15%含む
- 褐色細砂層
- 極暗褐色細砂層
- 黒褐色細砂層
- 暗褐色細砂層
- 暗褐色細砂層 F P 粟石を15%、焼土ブロックを10%含む
- 暗褐色細砂層 ロームブロックを10%含む
- 暗褐色葉砂層 焼土粒を10%含む

Fig. 13 H-11・12号住居跡



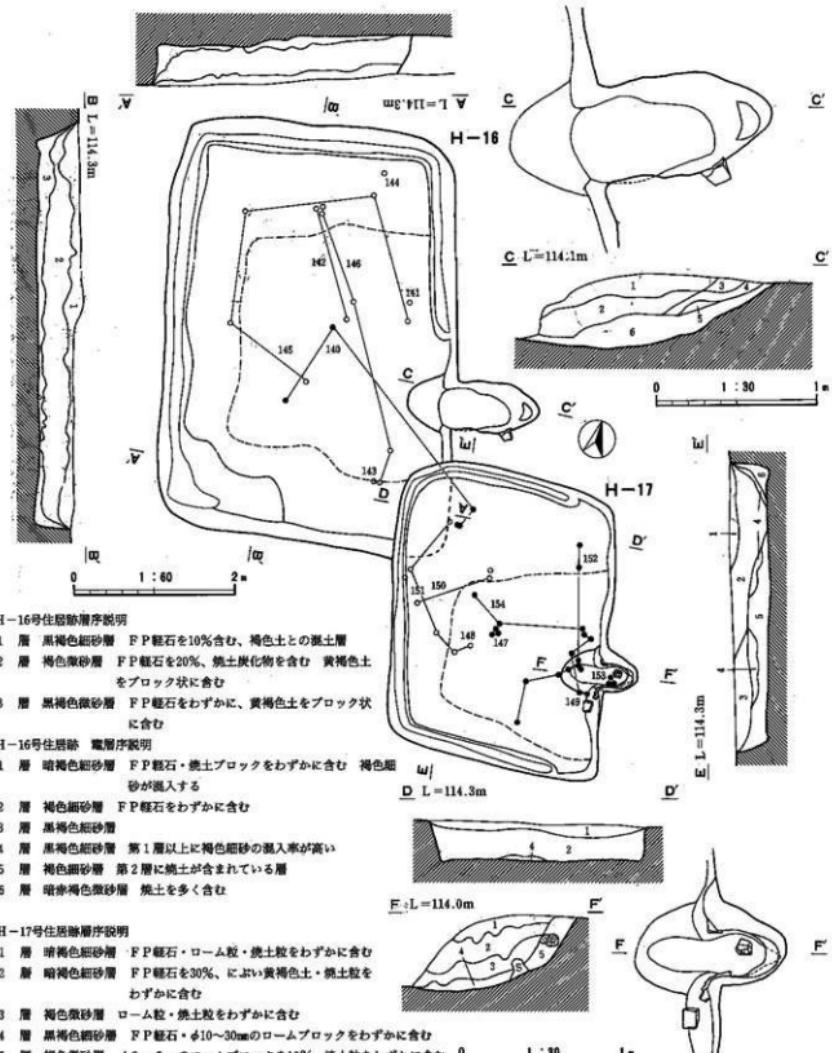
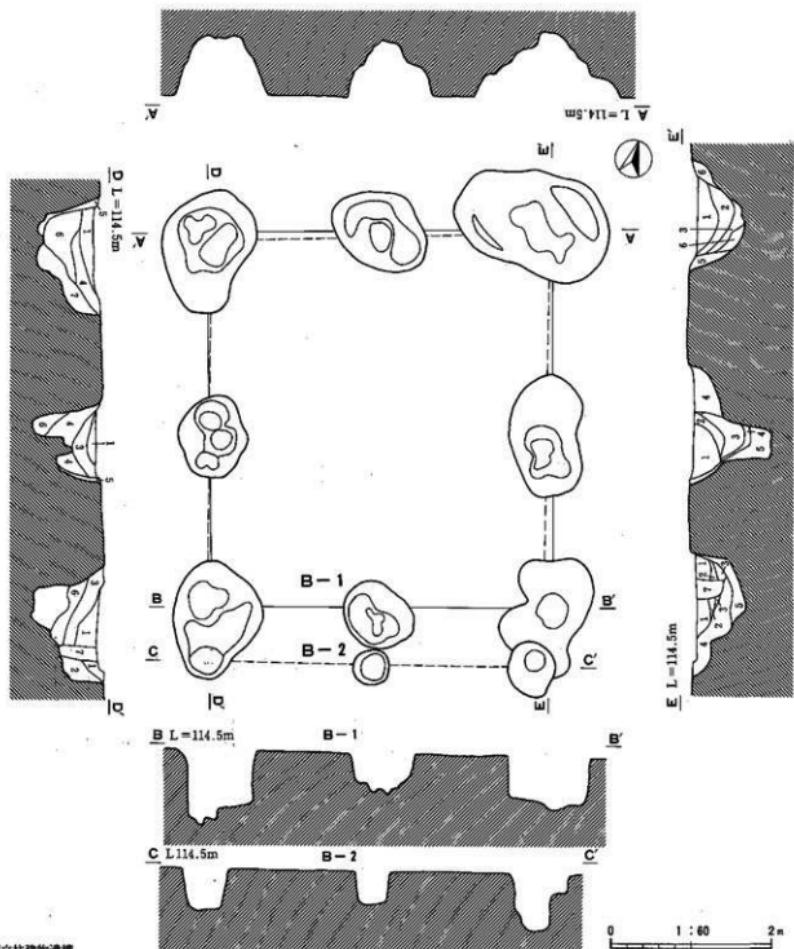


Fig. 15 H-16・17号住居跡



掘立柱建物遺構

B-1・2号掘立柱建物遺構層序説明

- 1 層 淡褐色細砂層 FP 鹿石を 5%、φ5~30mm のロームブロックを 25%、ローム粒を 5% 含む
- 2 層 黒褐色細砂層 FP 鹿石を 5% 含む
- 3 層 暗褐色細砂層 ローム土を 30% 含む
- 4 層 黑褐色細砂層
- 5 層 黄褐色細砂層 ローム粒を 40% 含む
- 6 層 黑褐色細砂層 φ5~10mm のロームブロックを 10%、ローム粒を 30% 含む
- 7 層 黑褐色細砂層 FP 鹿石を 複数に、ローム土を 10% 含む

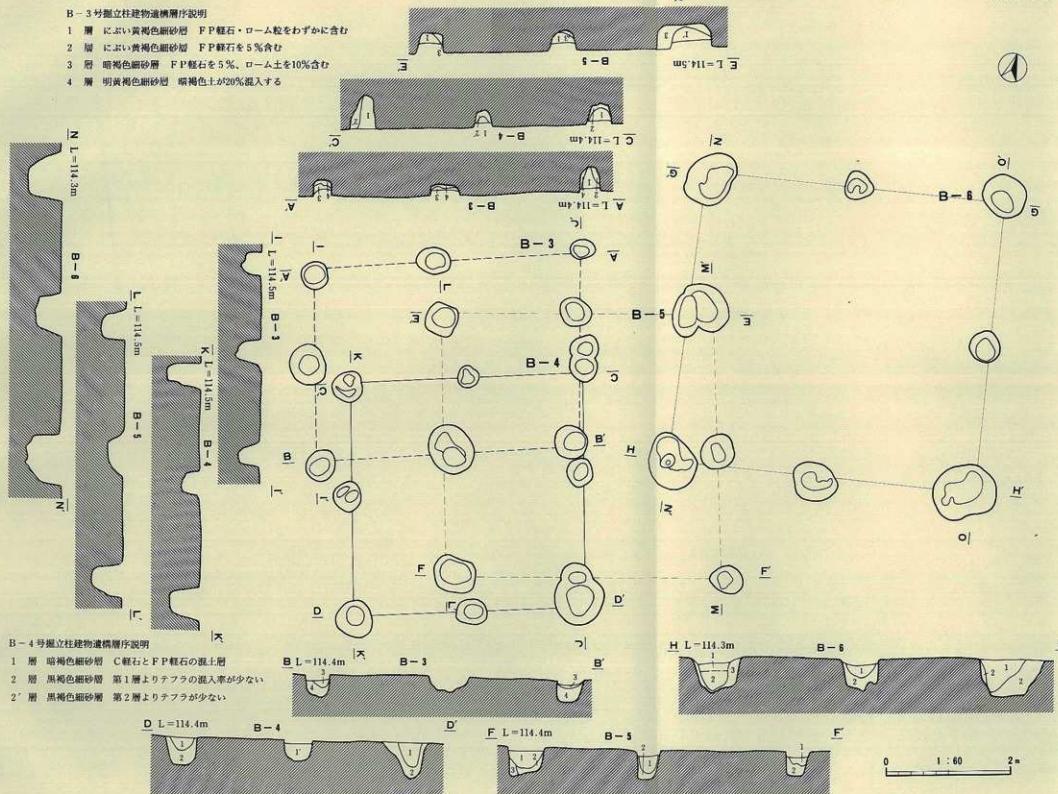
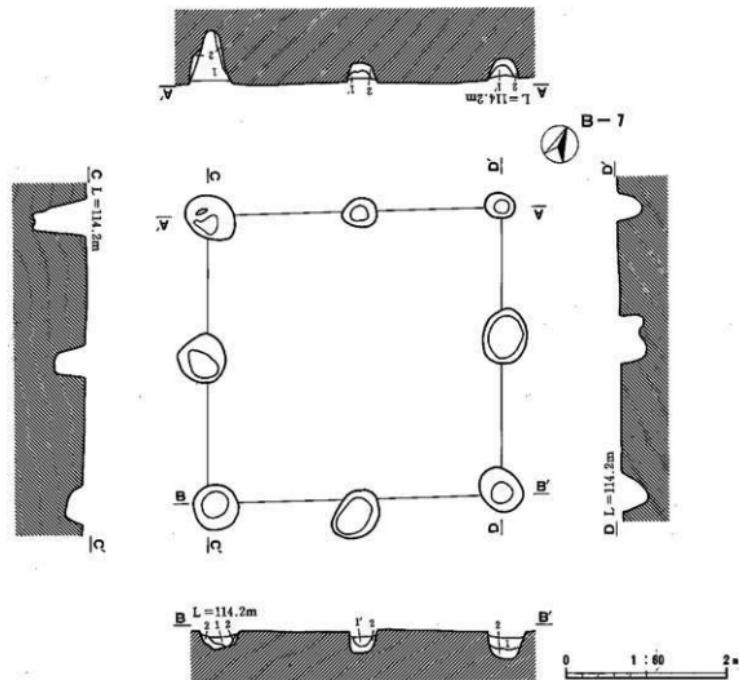


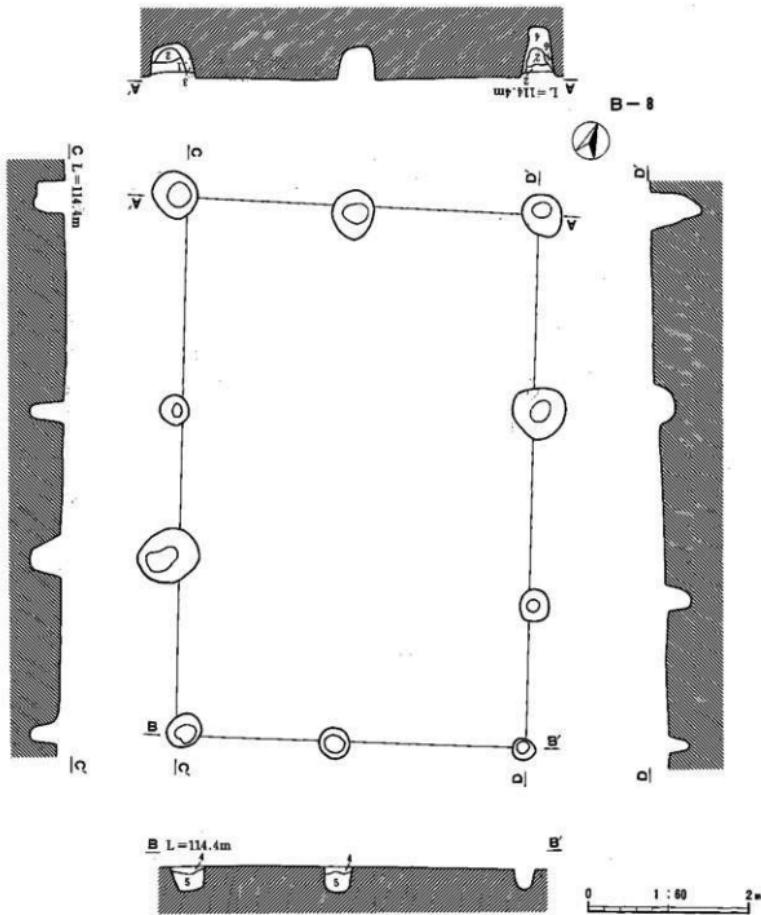
Fig.17 B-3・4・5・6号掘立柱建物遺構



B-7号掘立柱建物造築層序説明

- 1 層 喙褐色歛砂層 C軽石をわずかに含む
- 1' 層 黒褐色歛砂層 C軽石をわずかに含む
- 2 層 赤褐色歛砂層 ナフラ無し 第1層の土がわずかに混入する

Fig. 18 B-7号掘立柱建物造築



B-8号掘立柱建物遺構層序説明

- 1 層 黒褐色細砂層 C軽石を10%含む
- 2' 層 黒褐色細砂層 第2層以上にC軽石を含む
- 2 層 黒褐色細砂層 C軽石を5%含む
- 3 層 黄褐色微砂層
- 4 層 黑褐色微砂層 C軽石をわずかに含む
- 5 層 喰褐色細砂層
- 6 層 深褐色微砂層

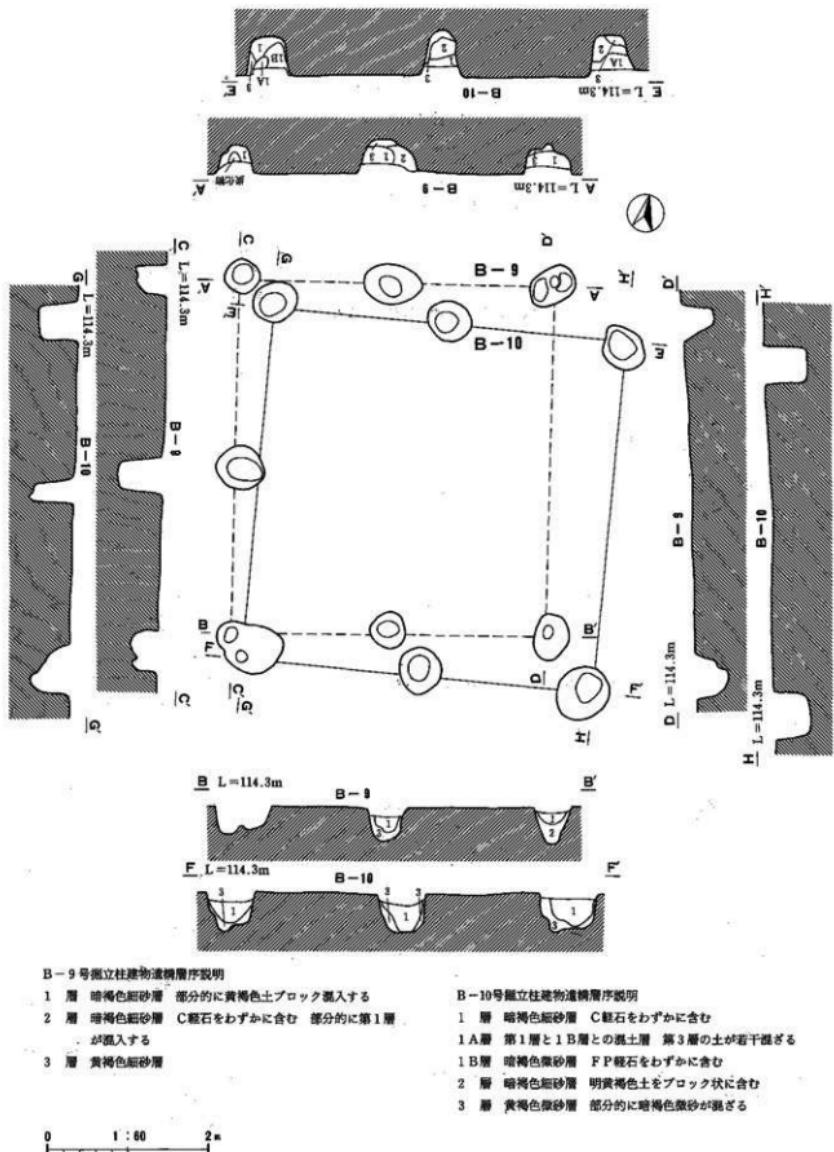
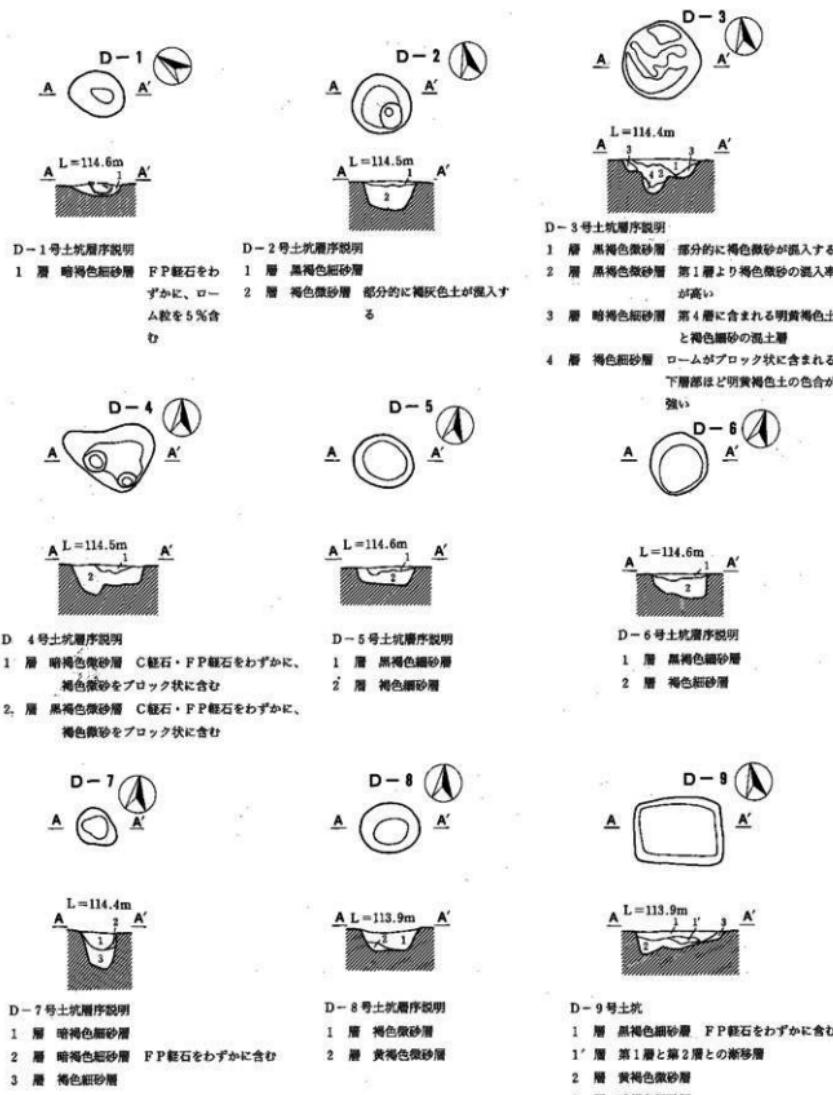


Fig. 20 B-9・10号掘立柱建物遺構



0 1 : 60 2*

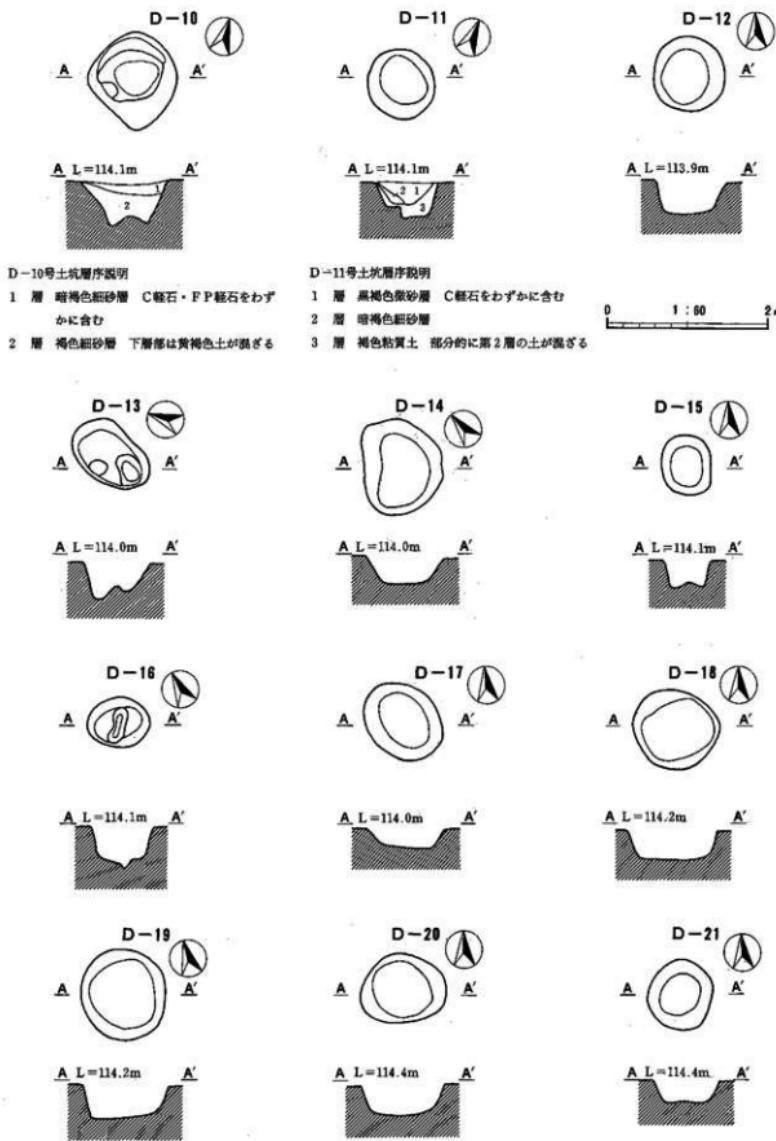


Fig. 22 D-10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21号土坑

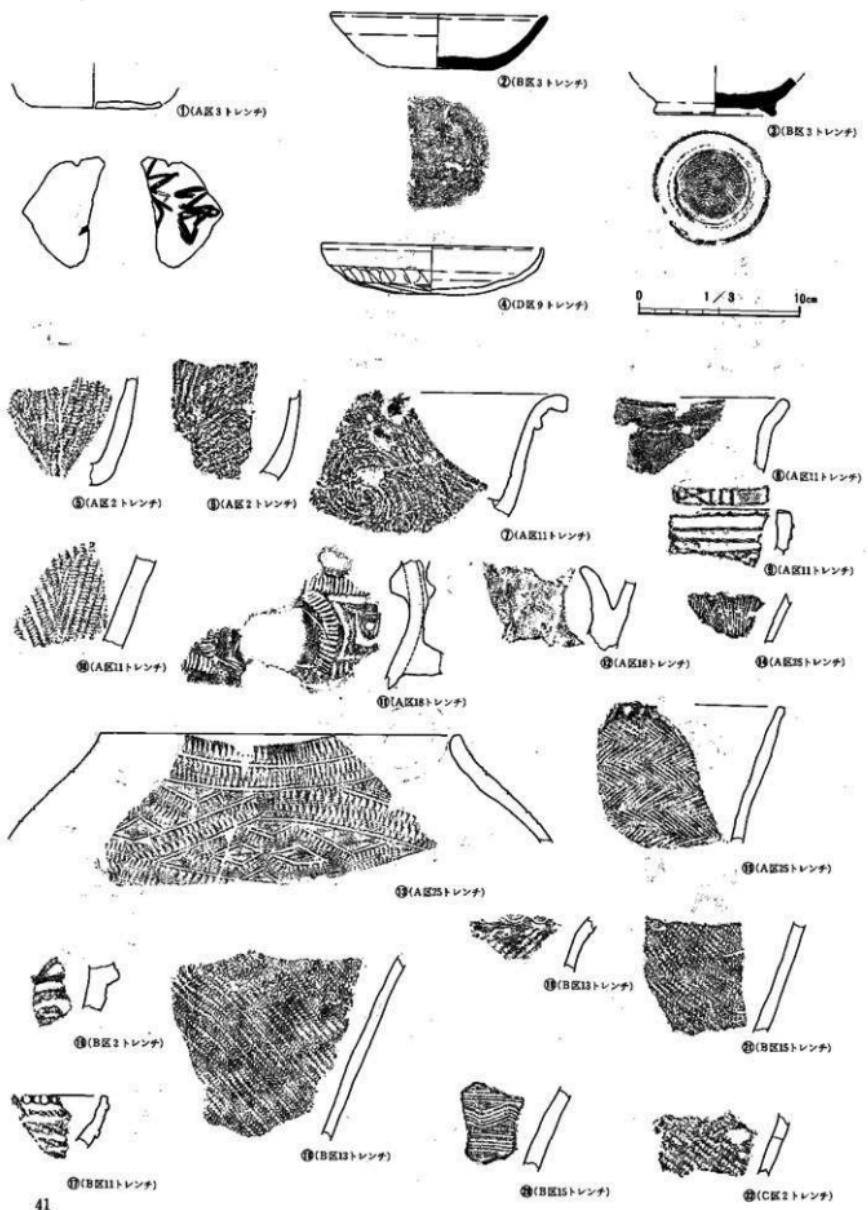


Fig. 23 試掘調査時出土遺物

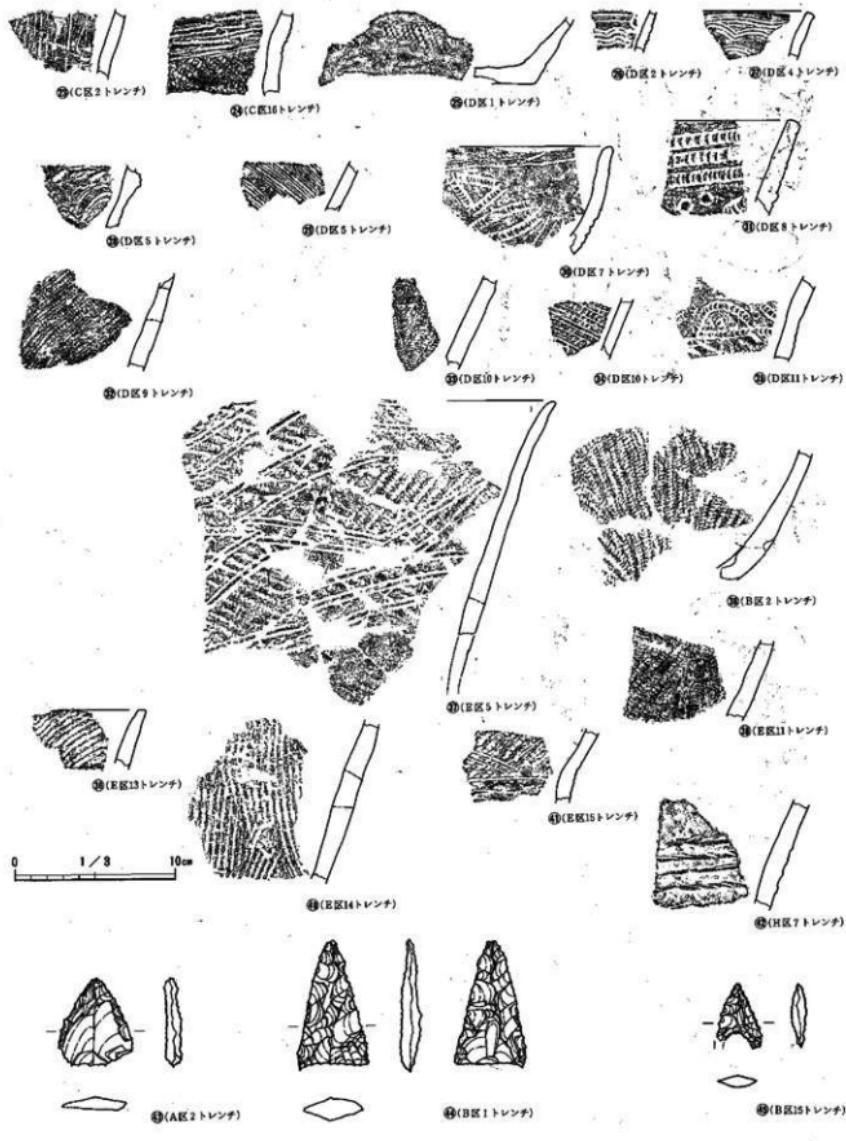
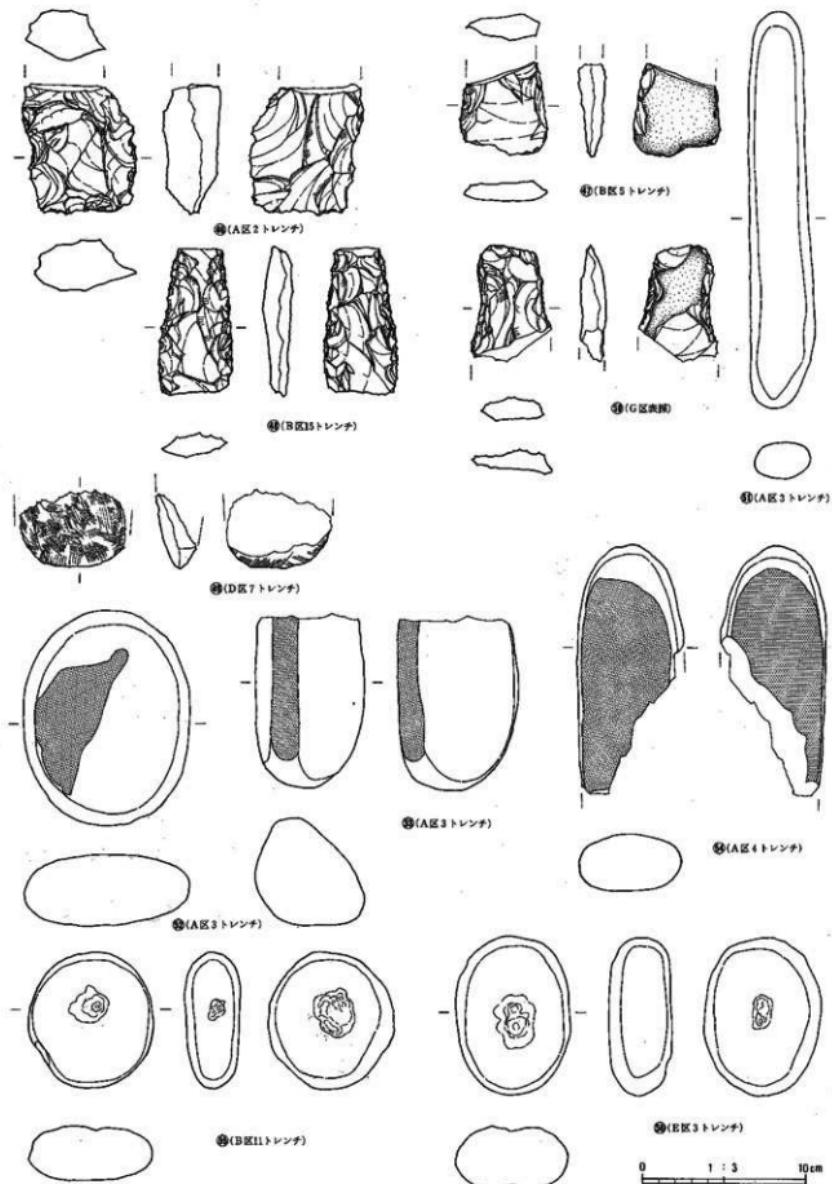


Fig. 24 試掘調査時出土遺物



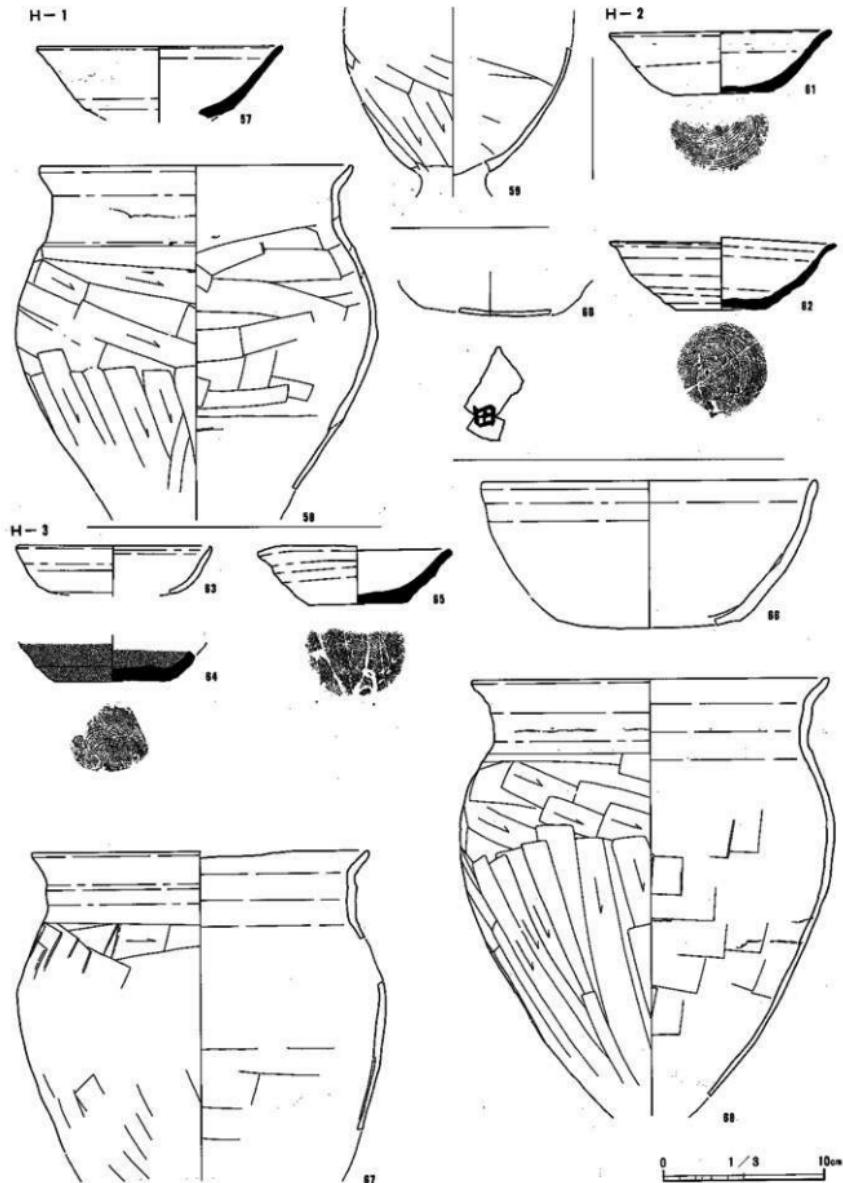
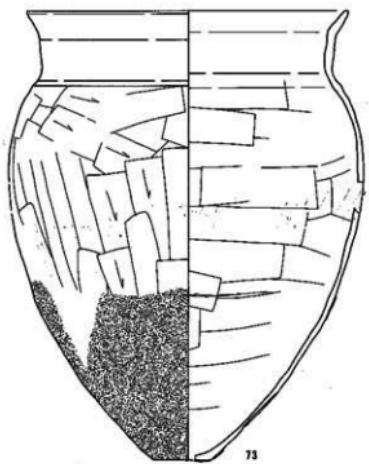
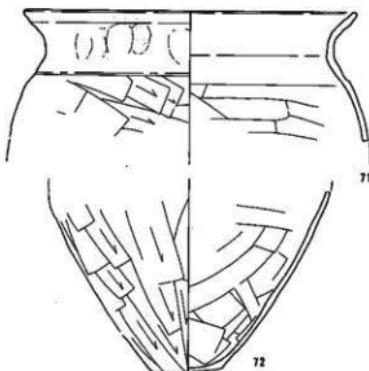
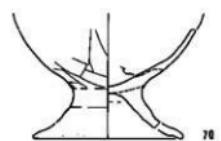
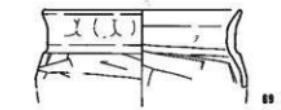
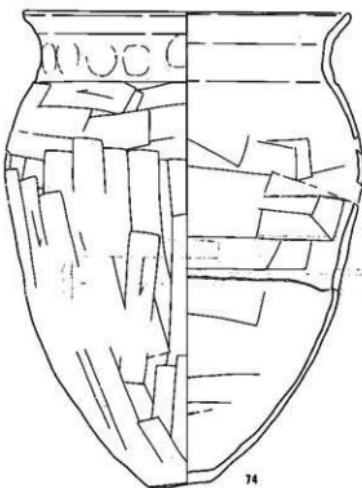
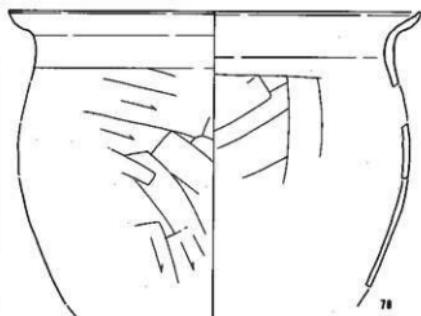
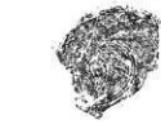
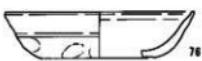


Fig. 26 H-1・2・3号住居跡出土の土器

H-3



H-4



0 1 / 3 10cm

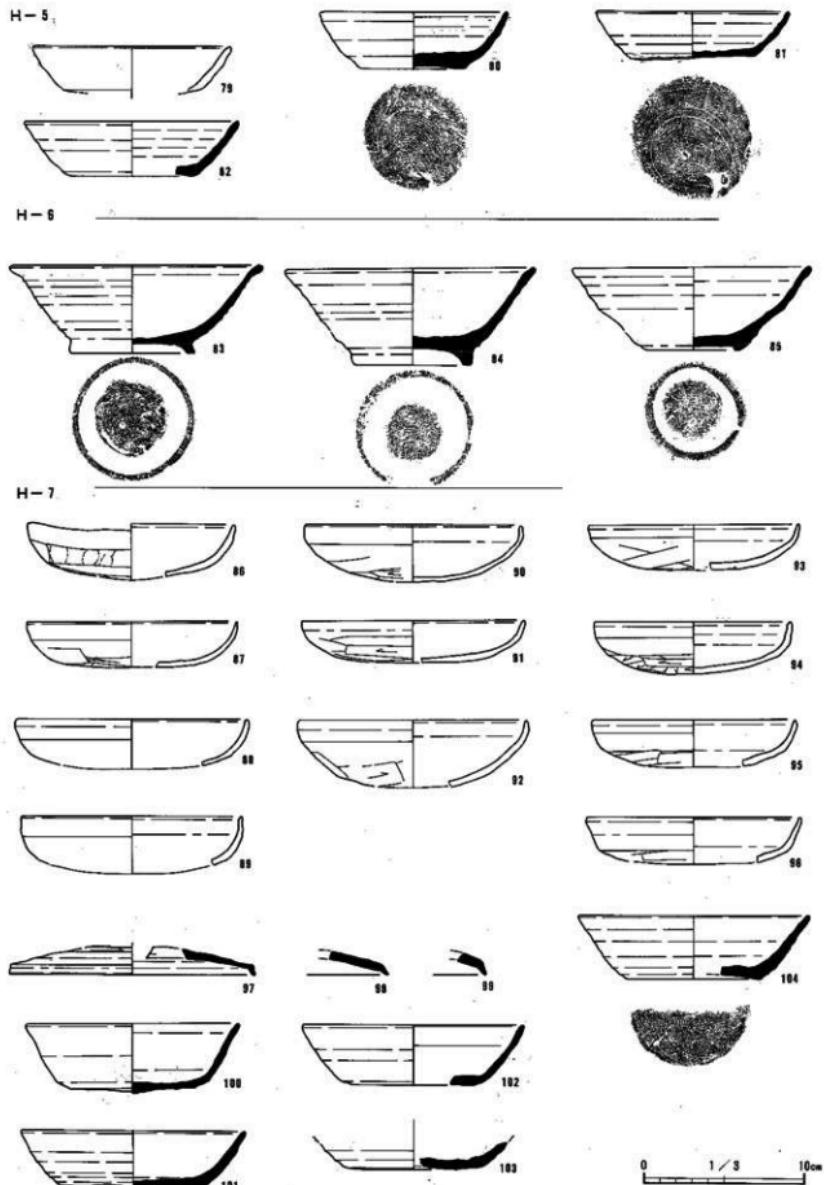
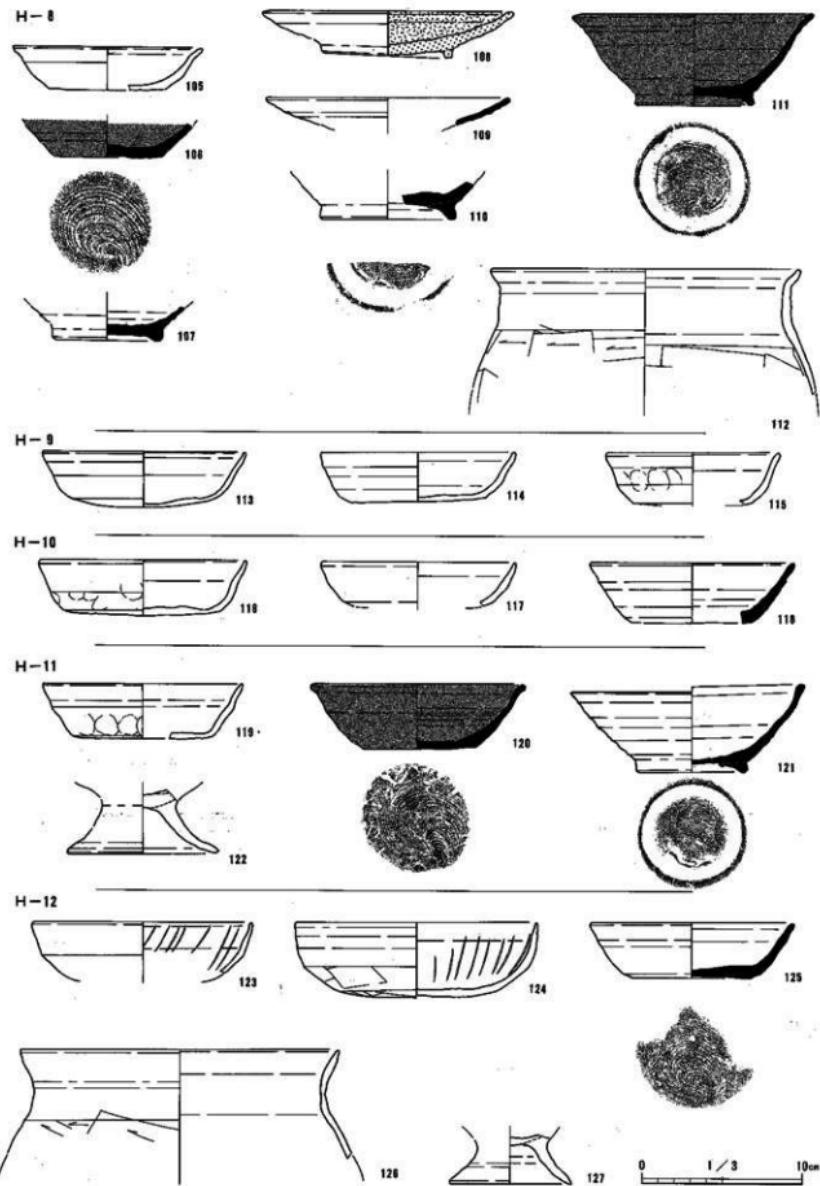


Fig. 28 H-5・6・7号住居跡出土の土器



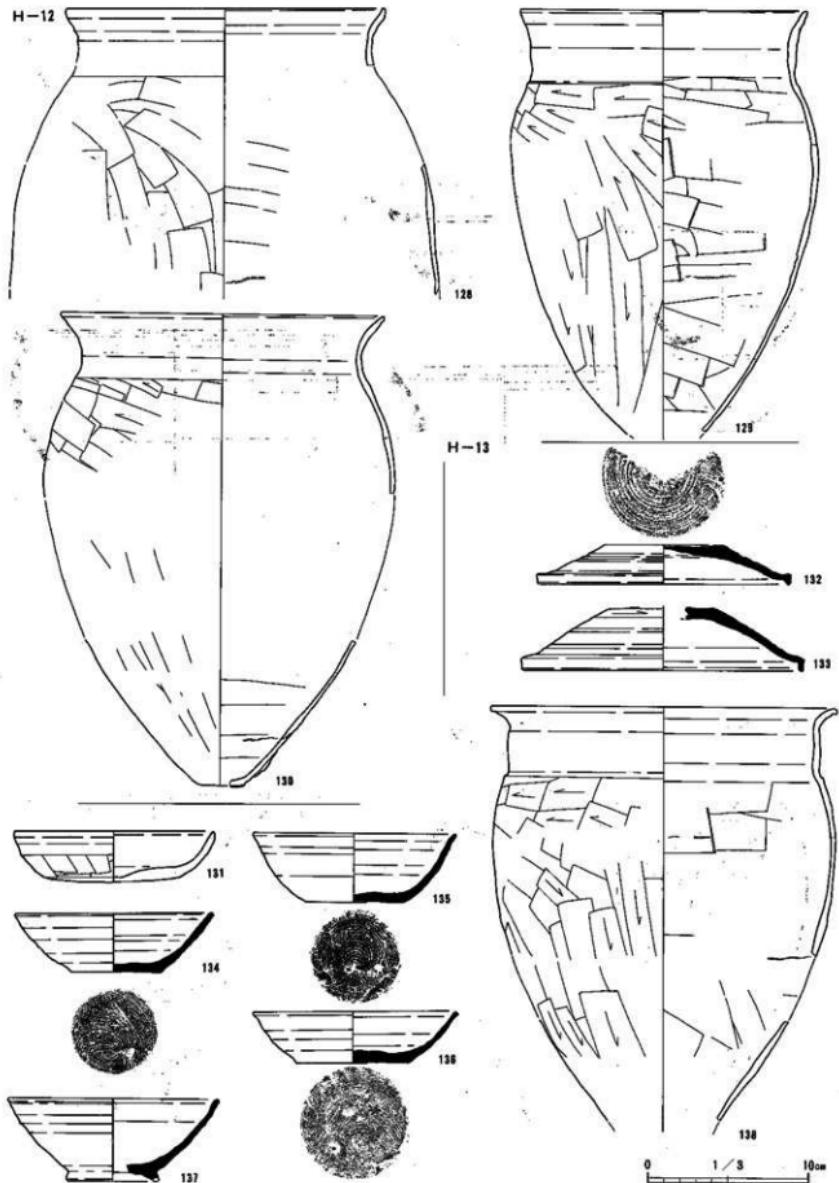
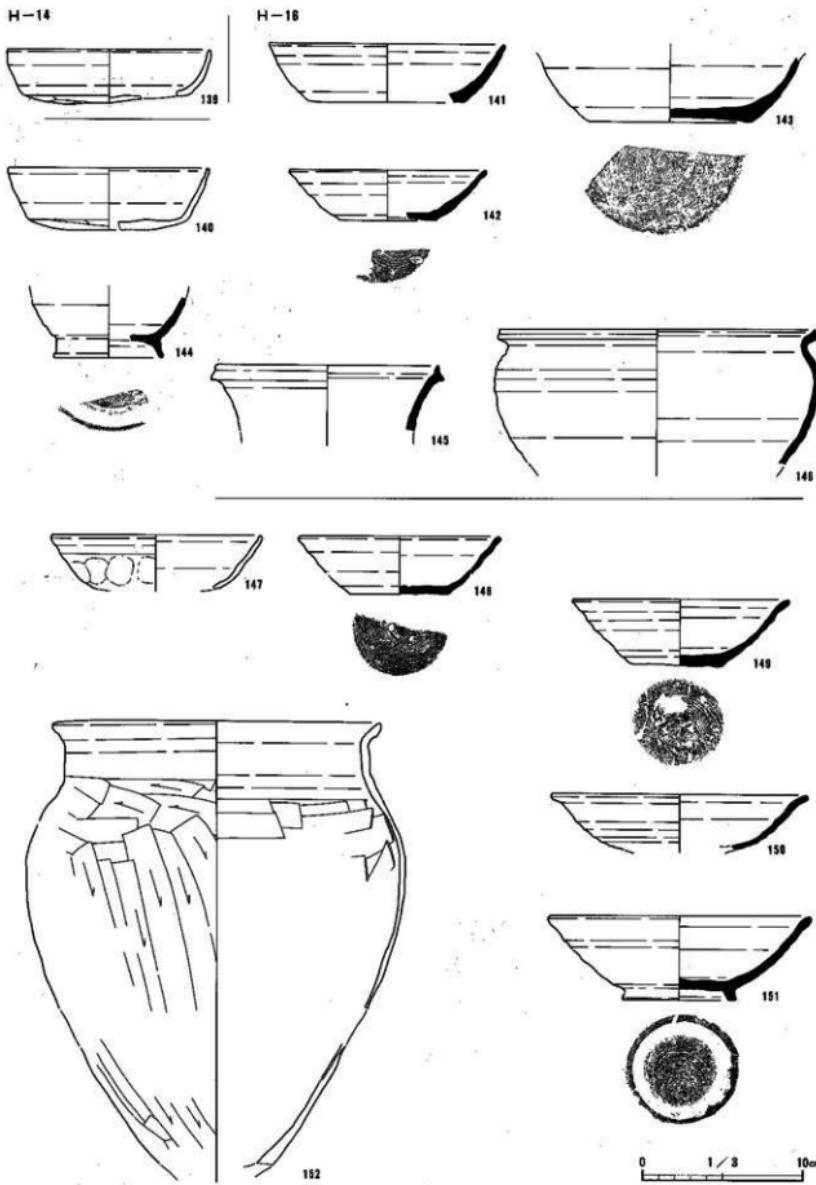


Fig. 30 H-12・13号住居跡出土の土器



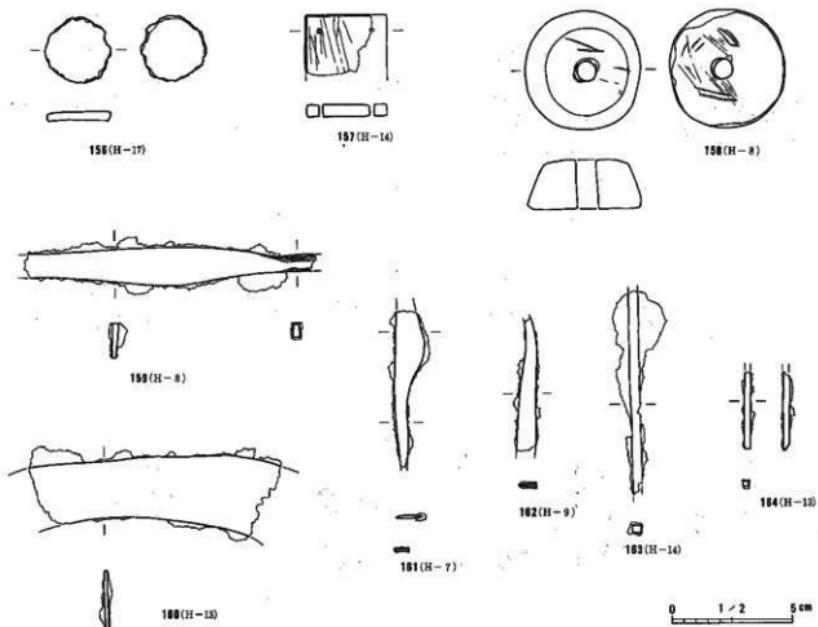
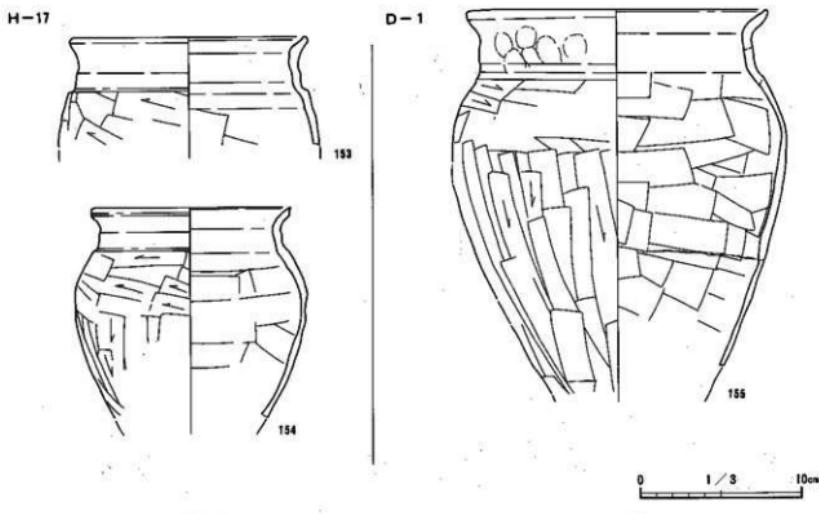
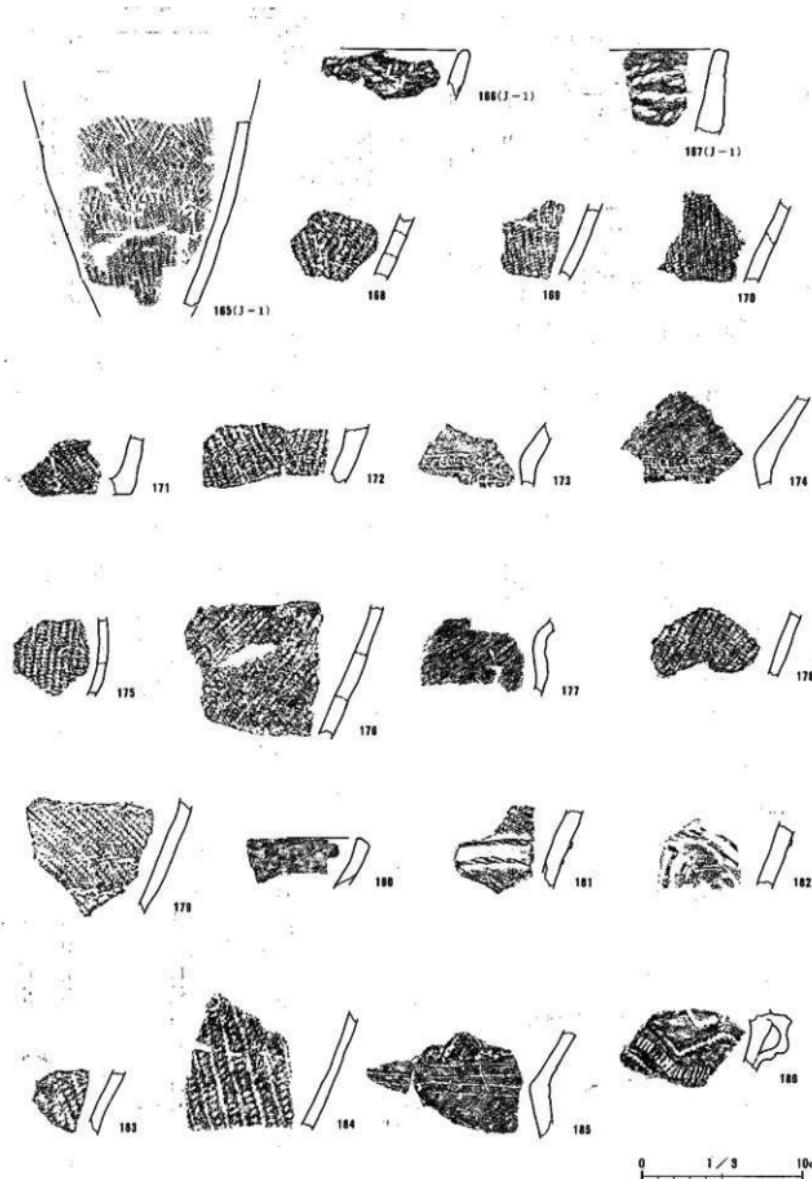


Fig. 32 H-7号住居跡・D-1号土坑の土器
調査区出土の土製品・石製品・鉄製品



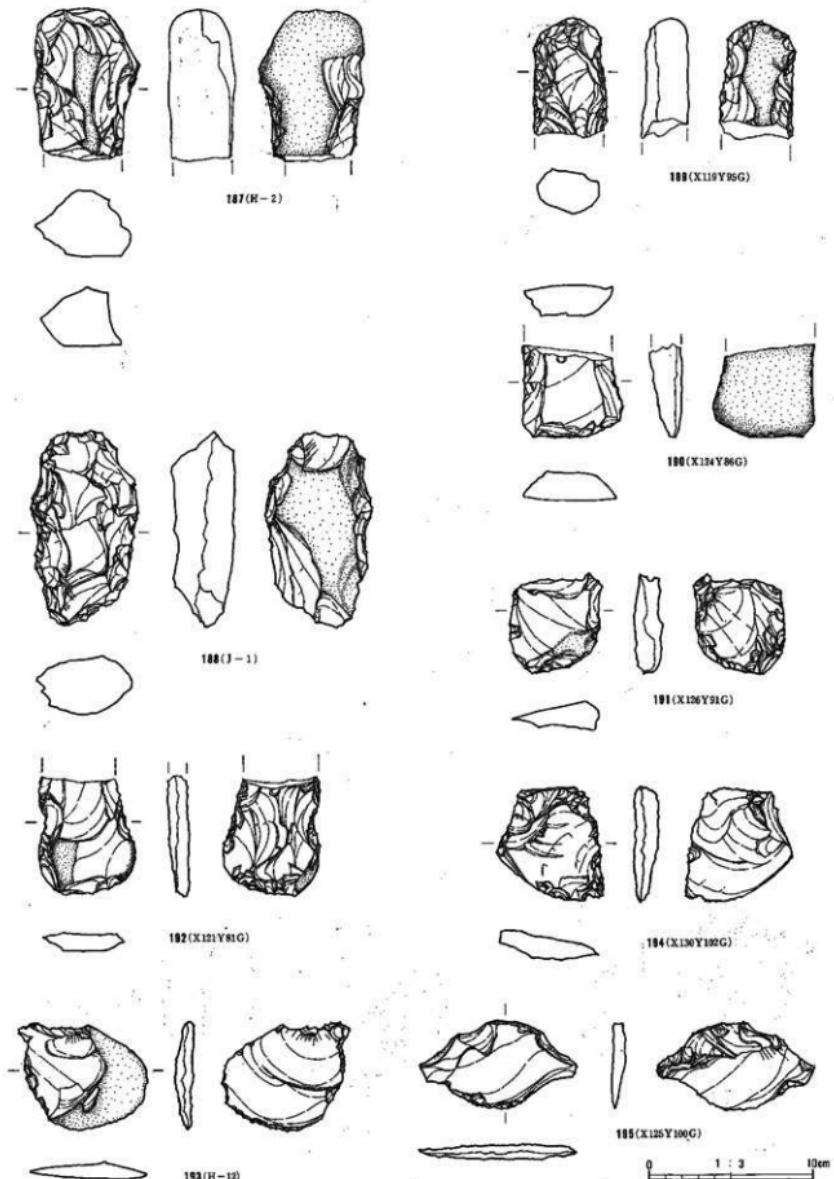


Fig. 34 調査区出土の土器

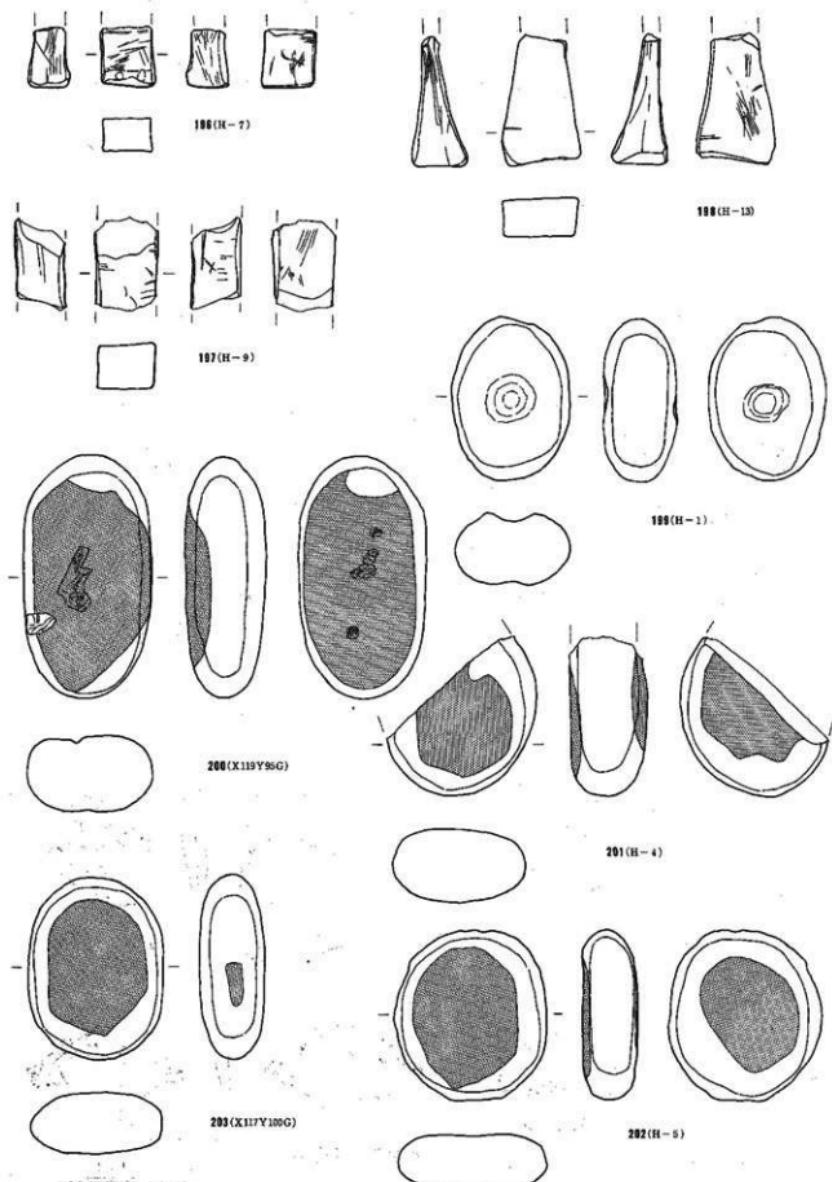


Fig. 35 調査区出土の石器

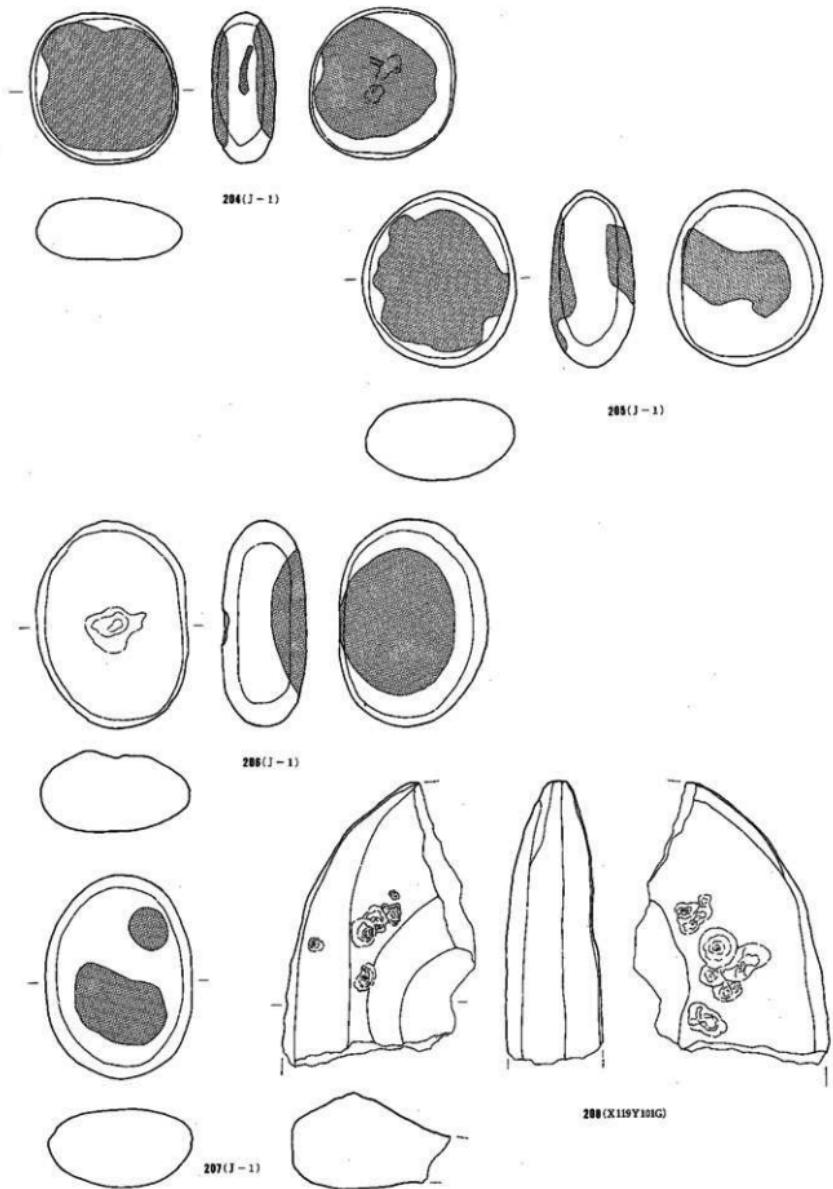


Fig. 36 調査区出土の石器



1 試掘A区14トレンチ（南から）



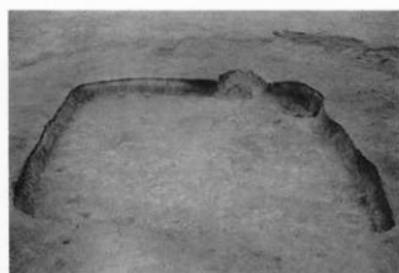
2 試掘A区16トレンチ（西から）



3 D-1号土坑遺物出土状態（西から）



4 H-1号住居跡（西から）



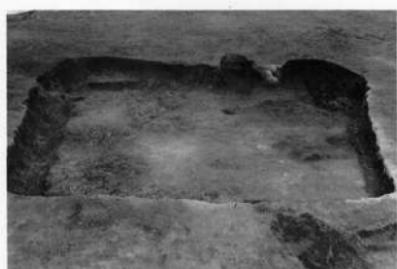
5 H-2号住居跡（西から）



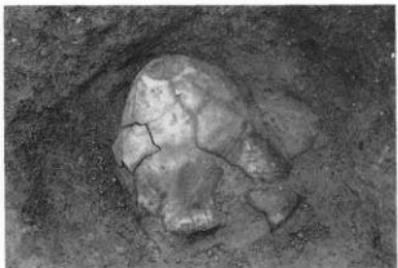
6 H-2号住居跡粘土溜まり（北から）



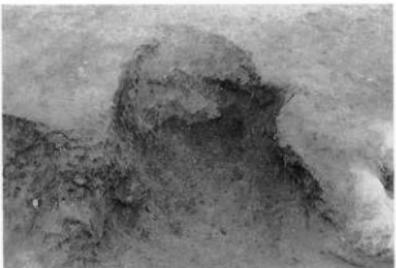
7 H-2号住居跡遺物出土状態（南西より）



8 H-3号住居跡



9 H-3号住居跡遺物出土状態（西から）



10 H-3号住居跡電（西から）



11 H-3号住居跡遺物出土状態（西から）



12 H-4号住居跡（西から）



13 H-5号住居跡（北から）



14 H-5号住居跡遺物出土状態（西から）



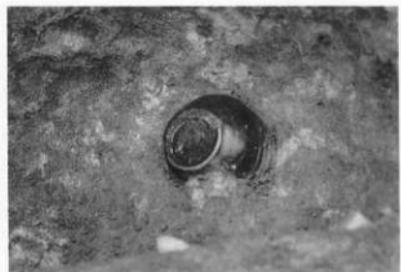
15 H-7号住居跡電（西から）



16 H-8号住居跡（西から）



17 H-7号住居跡（西から）



18 H-8号住居跡遺物出土状態（北から）



19 H-9号住居跡（西から）



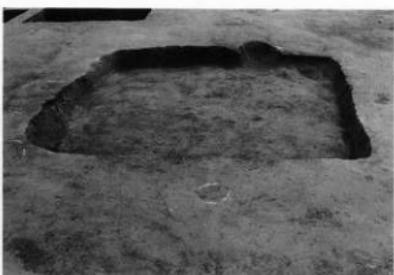
20 H-9号住居跡竪・焼土溜まり（西から）



21 H-10号住居跡（西から）



22 H-10号住居跡竈（西から）



23 H-11号住居跡（西から）



24 H-11号住居跡竈（西から）



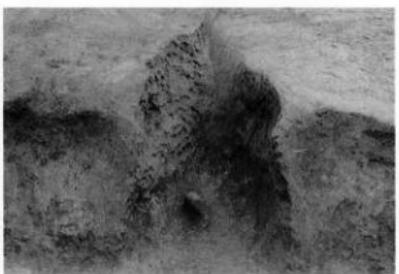
25 H-11号住居跡遺物出土状態（南から）



26 H-13号住居跡とH-14号住居跡（西から）



28 H-12号住居跡（西から）



28 H-12号住居跡電（西から）



29 H-13号住居跡（西から）



30 H-16・17号住居跡（西から）



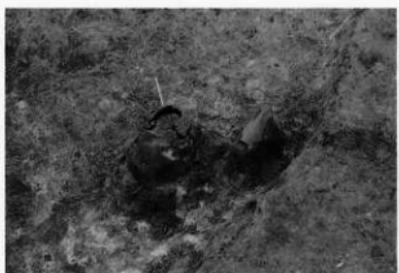
31 H-16号住居跡（西から）



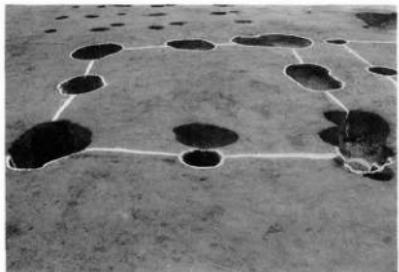
32 H-17号住居跡電（西から）



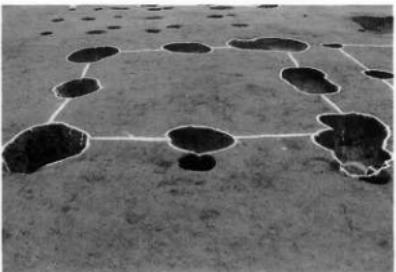
33 J-1号住居跡（西から）



34 J-1号住居跡遺物出土状態（南から）



35 B-1号掘立柱建物遺構（西から）



36 B-2号掘立柱建物遺構（西から）



37 B-3号掘立柱建物遺構（西から）



38 B-4号掘立柱建物遺構（西から）



39 B-5号掘立柱建物遺構（西から）



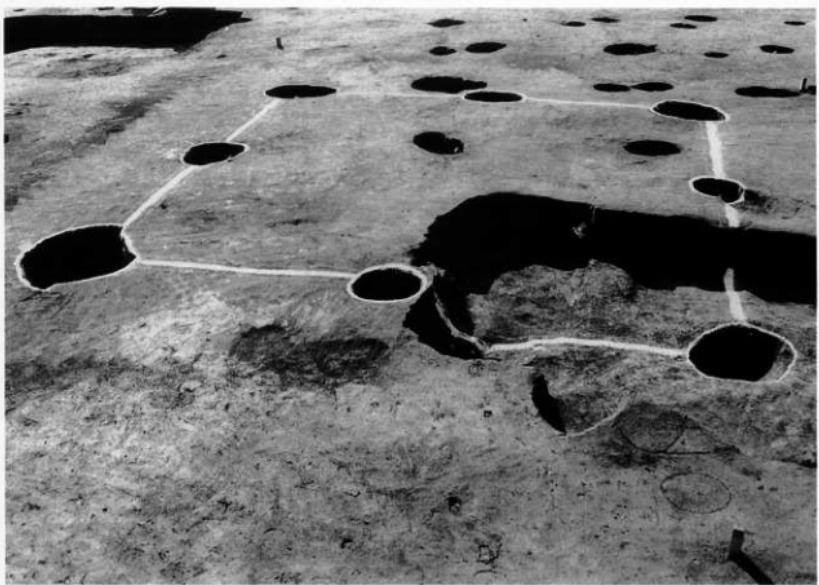
40 B-7号掘立柱建物遺構（西から）



41 B-9号掘立柱建物遺構（北から）



42 B-10号掘立柱建物遺構（北から）

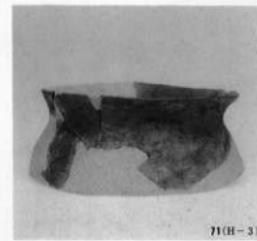
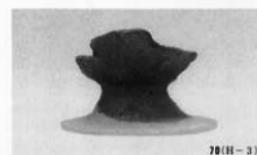
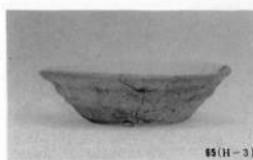
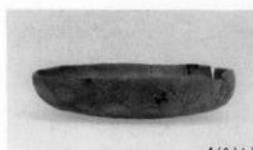


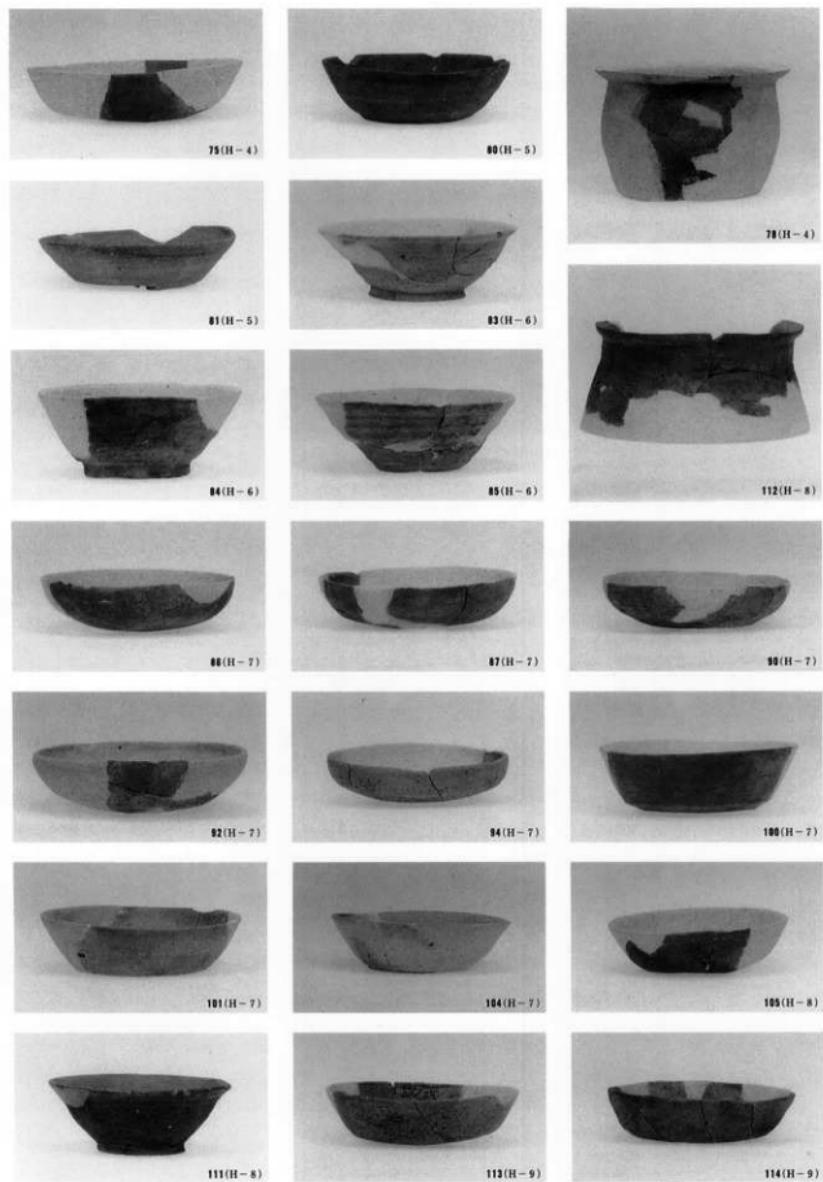
43 B-6号掘立柱建物遺構（東から）



44 B-8号掘立柱建物遺構（北から）

PL. 8







116 (H - 10)



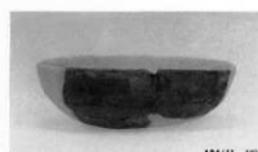
120 (H - 11)



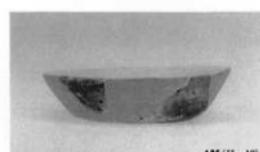
121 (H - 11)



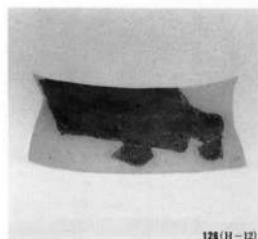
122 (H - 11)



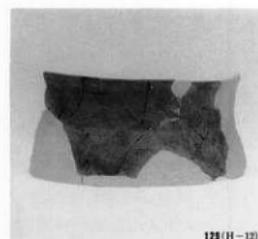
124 (H - 12)



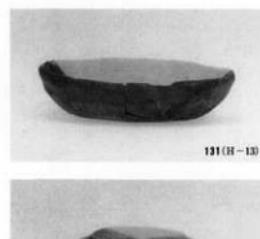
125 (H - 12)



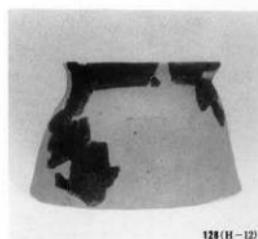
126 (H - 12)



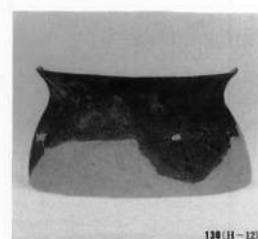
128 (H - 12)



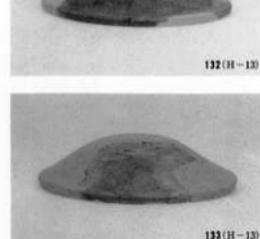
131 (H - 13)



127 (H - 12)



129 (H - 12)



132 (H - 13)



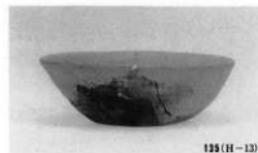
134 (H - 13)



136 (H - 13)



138 (H - 13)



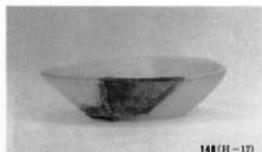
135 (H - 13)



137 (H - 14)



148 (H - 16)



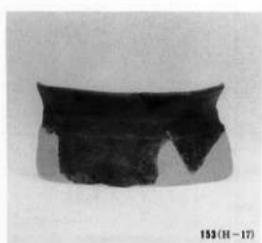
148 (H - 17)



148 (H - 17)



152 (H - 17)



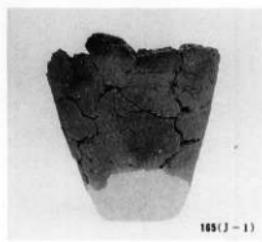
153 (H - 17)



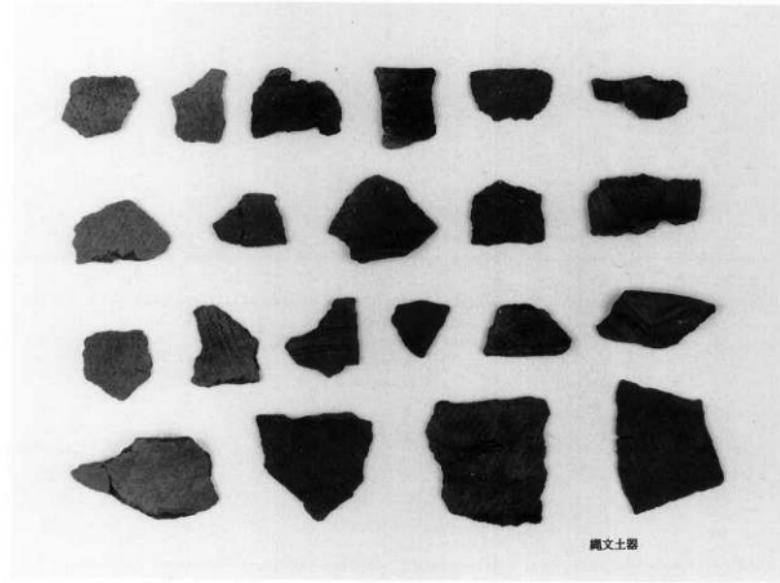
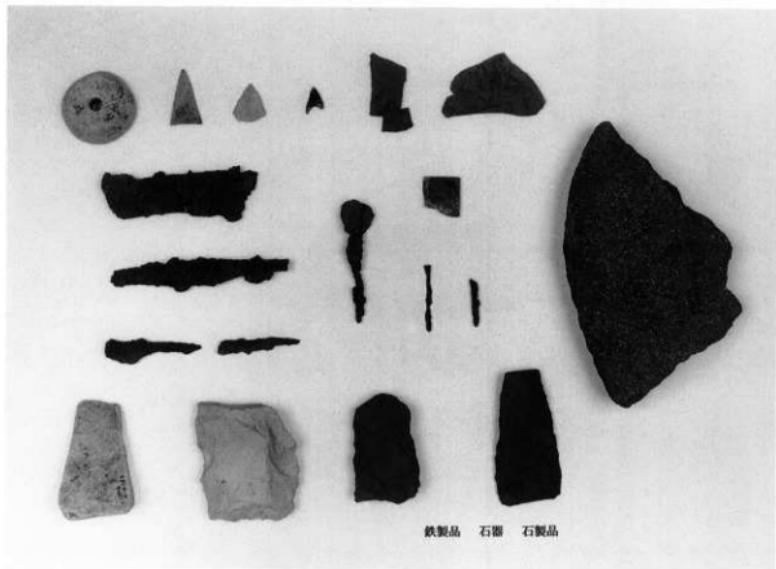
151 (H - 17)

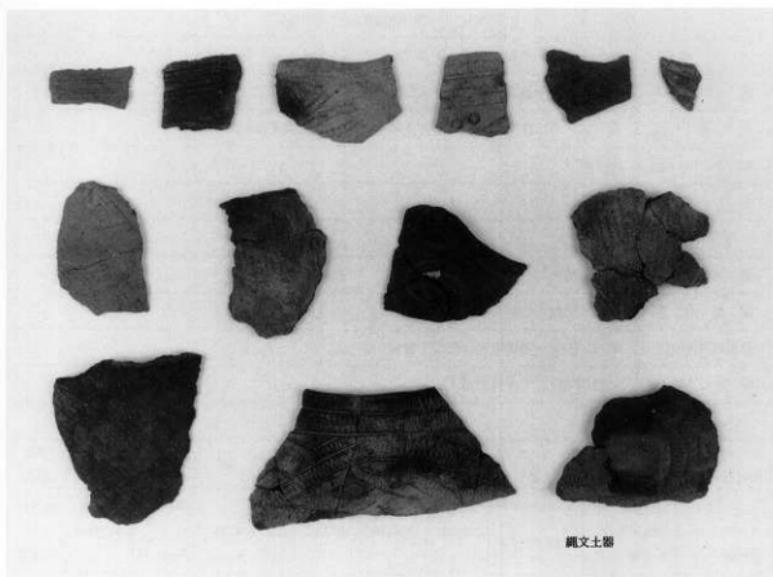


155 (D - 1)

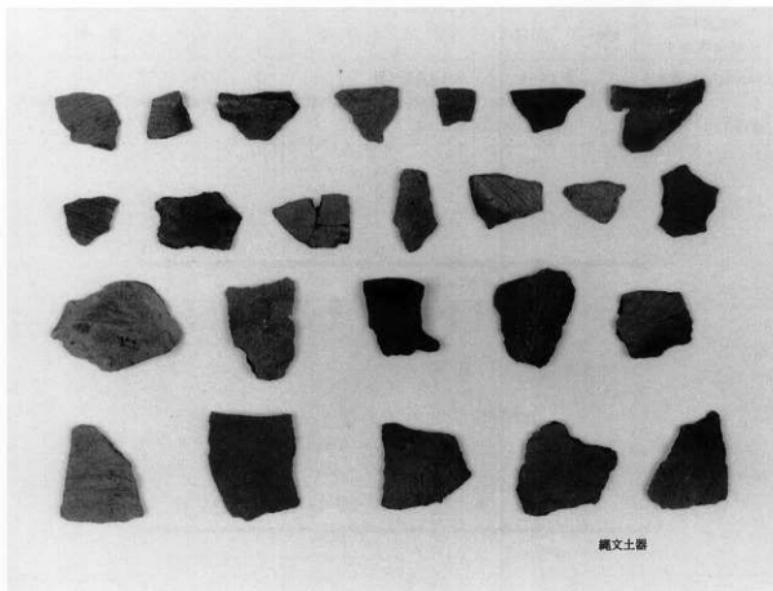


155 (J - 1)





繩文土器



繩文土器

Tab. 4 発掘調査報告書抄録

フリガナ	ローズタウンイセキグン トミダシモダイニチイセキ
書名	ローズタウン遺跡群 富田下大日I遺跡
副書名	ローズタウン住宅団地事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	第1巻
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編著者名	平野 岳志 高山 剛
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0018 前橋市三俣町二丁目10-2
発行年月日	2001(平成13)年3月23日

フリガナ 所収遺跡群名	フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
ローズタウン イセキグン	トミダシモダイニチ イセキ	マエハラシエギマチ	10201	12D16	36°23'31"	139°08'38"	20000518	7,268m ²	住宅団
ローズタウン 遺跡群	富田下大日 I遺跡	前橋市江木町					20010323		地造成

所収遺跡群名 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
ローズタウン遺跡群 富田下大日I遺跡	集落	縄文時代 奈良・平安時代	竪穴式住居1軒 竪穴式住居16軒、掘立柱建物10棟 土坑21基	土師器・須恵器・灰釉陶器・石器・鉄製品等

ローズタウン遺跡群 富田下大日I遺跡

平成13年3月23日 発行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
 〒371-0018 前橋市三俣町2-10-2
 TEL 027-231-9531

印刷 上毎印刷工業株式会社